
遊戯王 ~ Parallel Story ~

ミミック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王「Parallel Story」

【Nコード】

N8735Z

【作者名】

ミミック

【あらすじ】

5Ds・ZEXALとは別の世界―

「No.」と呼ばれるカードを遺し、行方不明となった恩人。二人は恩人の手がかりを求め、様々な困難に立ち向かう―

初投稿です。

低クオリティ、不定期更新ですがよろしく願います。

プロローグ（前書き）

初めまして。

ミミックです。

初の遊戯王作品なので、ミス等目立つと思いますが、応援お願いします。

ブローグ

とある豪邸

四人の人影があつた。

長身の青年、小柄な少年、二人を心配そうに見る少女。そして、贅肉をゆらし怒りをあらわにしている景気の良さそうな男

「あんたの悪事はもうマスコミに広めた。どうあがいても、終わるだ。」

小柄な少年はけらけらと笑いながら男を挑発する。

「……何故だ！何故そんな忌まわしい小娘を庇う！」

男は唾を散らして怒鳴った。長身の男は、淡々と

「それが、今回の仕事だからだ。」

と言った。

凍てつくように寒い、午前2時ごろの出来事だった。

第1話：悪党よりも悪党で（前書き）

今回デュエル無しです。

あれ？入れるつもりだったのになあ…

第1話：悪党よりも悪党で

とある豪邸

少女、緋色かなめは疲れていた。

その原因は

「おいっ！飯はまだか！！」

と贅肉を震わせ怒鳴っている、成金なりかね 金造きんぞうという彼女の養父である。

彼は元々緋色家の経営する会社の幹部にであり、かなめの父が行方不明になった後社長の座を乗っ取り彼女を引き取った。

彼は彼女の親族がいないのを良いことに、昼夜彼女をただ同然で働かせ、時には虐待をしている。

自殺。

まだ幼い少女にそう考えさせるには、十分な環境だった。

「はあ……」

仕事の終わった夜、彼女の机にはナイフが置かれていた。

「お父様、お母様」

最愛の二人を想い、喉元にナイフを刺そうとしたとき、

「痛っ！」

別の声が出たかと思うと、ナイフの刃を掴み、喉元寸前のところで止めていた。

「あ……あなたは……？」

と、言うとは小柄なその少年は

「雑賀 奏太……探偵さ」

と言って、何が面白かったのか、けらけら笑っていた。

「……探偵さんが、なんの用ですか？そもそも、どうやって中に？」

「僕の相棒がここの警備を引き付けて、その間に君のところに来た。後、なんの用かってーと、君のお父さんから、娘を助けて欲しいって依頼が来てね。警察は、しょーこふじゅーぶんって動かないらしい。ホント警察ってのは…」

彼は愚痴を言っているが、かなめの耳には入らなかった。父は自分の事を守ろうとした…そのことで彼女は頭が一杯だったのだ。

「じゃ、早速ずらかりますぜ！」

一通り愚痴を終えた奏太は、かなめの手を掴んだ。

「で、でも出口はすごい鍵がかかって…」

「セキュリティのこと？おいおい、俺達がどうやって侵入したと思ってるんだい？んなもん、ハッキングして壊したよ。」心配するかなめにドヤ顔で言う奏太。

「ハッキング？…本当に何者なんですか？」

「だから、ただの探偵だって！」

屋敷を脱出した奏太とかなめ。

「おーい、銀さーん」

奏太が大声で呼びかけると、

「その呼び方止めるって」

と、いかにも探偵だ、

という感じの服を着た男があらわれた。

「依頼の人物と証拠は？」

「バツチリっす！」

冷静に聞く男と、元気な奏太。二人の温度差に戸惑っているかなめに

「君が、緋色かなめか。俺は四条銀次。君の父親から依頼を受けた時、彼から手紙を預かっている。」

と、言いかなめに手紙を渡した。直後…

「ぜえ…ぜえ…まで！」今回の依頼上での要注意人物、成金金造があらわれた。

「こんなことをして…ただですむと思うなよ!」「こんなこと?」
興奮する金造に、あくまで冷静な銀次。

「とぼけるな!うちの警備員、セキュリティをひとつ残さずボロボロにしゃがつて…!犯罪だ!

「犯罪…ねえ。お前がしてきた悪事の数々に比べれば、可愛い物じゃないか。」

「なんの事だ…!!」

「はいはい!証拠ならあるよ」

二人の会話に割り込む奏太。

「あんたの部下から聞いたよ。不正献金、使い込み…後、家政婦の皆さんから、かなめちゃんへの扱いも聞いたよ。あんた、人望ないねえ…」

証拠をつき出され、絶望する金造。

「な…何故だ!何故お前はこんななんの足しにならん忌まわしい小娘を助ける為にここまでする!」

銀次は、多少呆れながら、

「それが…俺の仕事だからだ。多少無理してでも父親…依頼主の要求には答えねえとな。」

と、言った。

「まあ、お前の言うことも一理ある。確かに俺らのやった事は犯罪だ。」と、言い

「デュエルだ。お前が勝ったら俺らを警察につきだすと良い。お前が負けたら、警察へ…どうだ?」

「デュエル…だと?良いだろう。貧民ごときが、思いしると良い!」

「そうか…なら…」
銀次が不敵に笑い、
「デュエル！」
闘いが、始まった。

第1話：悪党よりも悪党で（後書き）

すみませんでした…

途中ノリノリで書いていたらいつの間にか遊戯王じゃなくなって…
急いで展開修正したら、なんと いう 超 展 開
一応ここでデュエルを挑んだ理由は次話で描写
します。

主要な登場人物 1（前書き）

とりあえず、主な登場人物です。

この話の設定は仮面ライダーWをかなり参考にしております。

主要な登場人物 1

四条 銀次 （しじょう ぎんじ）

性別：男

年齢：21

本作品での主人公。

12歳のとき、とある理由で家族に見放される。途方に暮れていたところを雑賀 仁朗に拾われる。基本的になんでもこなす高性能お兄さん。

ハードボイルドを気取るが、奏太達に振り回されボロが出ることが多い。少し変わった趣味をもつ。

使用デッキ

【悪魔＋エクシーズ】

雑賀 奏太 （さいが そうた）

性別：男

年齢：16

雑賀 仁朗の息子であり、父の情報網を受け継ぎ 探偵業では主に情報収集をする。

オタク趣味を持っていて、よく謎発言をしている。

見た目は背が低く女の子っぽく（というより男の娘）一目で男と分かったのはかなめくらい。

銀次を兄のように慕っていて、「銀さん」と

某侍漫画のような愛称で呼んでいる。

使用デッキ

【トークン】

緋色 かなめ （ひいろ かなめ）

性別：女

年齢：12

大企業「緋色カンパニー」の一人娘。

両親が行方不明になり、成金家の養子になる。
虐待と労働に嫌気が差し、自殺を図ろうとしたところ奏太に救われる。

幼い時から苦勞しているのも、大人びた性格で、銀次、奏太の暴走を止めたりすることも。

洞察力も鋭く、奏太を

一目で男と見抜いた。家事の腕は一級品だが、デュエルの腕は発展途上。使用デッキ

【スターダストドラゴン】

雑賀 仁朗（さいが しろう）

性別：男

年齢：41

奏太の父親であり、

「No.」のカードを二人に遺した張本人。（5DSの雑賀とは無関係）

行方不明になる前は裏社会の情報屋を営んでいて、多数の人物を破壊させていた。せめてもの償いとして 身寄りのない子供を養っていた。

ある日、デュエルモンスターズの脅威に気がつき、特に才能のある二人に カードを託し、行方をくまらず。

主要な登場人物 1（後書き）

銀次 鬼柳（満足町長ver）

奏太 バカテスの秀吉

かなめ 遊戯王TFの瀬良あゆみ

仁朗 まんま5Dsの雑賀

容姿のイメージです。

質問、間違いなどありましたらお願いします。
次回は本編です。

第2話 「No」のカード（前書き）

今回はデュエルです。

まだ慣れていないので、間違い・疑問などございましたら、ご指摘お願いします。

荒らし、中傷などは作者のLPは0よ！になりますので、NGです。

第2話 「No.」のカード

side：銀次

「デュエル！」

四条銀次 LP8000

成金金造 LP8000

「わしの先行、ドロー！」

金造がカードを引く。

さっきの奇妙な自信、野心的な行動…あのカードを持っていると思うが…

「わしは、カードを一枚セットし、ターン終了！」

成金金造 LP8000

手札5枚

あまり動かないな…

「俺のターン、ドロー。俺は、ジャイアントウィルスを召喚。そのままダイレクトアタック。」

球体のウィルスが、金造を襲う。

ジャイアントウィルス ATK1000

成金金造

LP7000

「畏発動！ダメージ・コンデンサー！手札を一枚捨てて発動。受けたダメージ以下の攻撃力を持つモンスターを特殊召喚する！いでよ！成金忍者！！」

成金金造

手札4枚

成金忍者 ATK500

金造の場に、豪華な装飾の忍者（？）が現れた。

「…俺は強欲なカケラを発動。カードを一枚伏せて、ターンエンド。」

「

四条銀次LP8000

手札3枚

「ふん！その程度でわしに勝てるか！ドロー！！いでよ、黄泉ガエル！」

頭の上に輪があるカエルが現れる。なるほど、さつきコストとして墓地に送ったのか。

「更に成金忍者の効果発動、手札の罨一枚を捨て、デッキからLV4以下の忍者を特殊召喚する！現れる、機甲忍者フレイム！」

機甲忍者フレイムATK1700

「機甲忍者フレイムの効果で自身のLVを一つあげる！更に、黄泉ガエルをリリース、LV5の機甲忍者アースを召喚」

機甲忍者アースATK1600

機甲忍者フレイムLV45

LV5が二体：くるか？

「さて…まずはその目障りな屑を片付けよう。アースでジャイアントウイルスに攻撃！」

四条銀次

LP7400

「ジャイアントウイルスの効果！戦闘で破壊された場合、相手に500ポイントのダメージを与え、デッキから二体のジャイアントウイルスを特殊召喚する！」

成金金造

LP6500

「構わん、フレイムよ、その屑を蹴散らせ！」

「畏発動！ドレインシールド！相手の攻撃を無効にし、その数値分回復する。」

四条銀次

LP9100

「小賢しい……わしはフレイムとアースでオーバーレイ！エクシーズ召喚！深紅の影よ、我が為に下僕に無敵の肉体を！？12機甲忍者クリムゾン・シャドー！！」

金造の腕に、12という刻印ができ、深紅の忍者が姿を現した。

やはり？か。この男が急速に力をつけたのも、このカードのおかげか……。

「わしは成金忍者を守備表示に変更し、ターンエンド。このカードがある限り、わしに敵はいない！」

成金金造LP6500

手札3枚

「……俺のターン！この瞬間、強欲なカケラのカウンターが一つの。」

強欲なカケラ（01）

「俺は、死者蘇生を発動。墓地から、ジャイアントウィルスを特殊召喚。……？はお前だけのものつてわけじゃあない。俺は、三体のモンスターでオーバーレイ！破滅の意志よ、俺に力を！エクシーズ召喚！？96ブラック・ミスト！！」

俺の前に、96の刻印を持つ、残虐性を露にした悪魔が現れた。

side：奏太

やっぱり、あのおっさんNo.のカードを持ってたか。

「あの…なんで銀次さんはデュエルを挑んだんですか？あのまま警察につきだせば、侵入もうやむやにできたかも知れないのに…」
かなめちゃん不思議そうに聞いてくる。

「ん…あの『No.』ってカードがあるだろ？あのカードはカード自体が強力な力を持っていて、持ち主の精神に変調を起こす。僕と銀さんは、あいつがそのカードを持っていると考えてデュエルを提案したんだ。」

「そんなカードを、なんで集めているんですか？」

「えっと、何て言えば良いかな…？」

僕が返答に困っていると、銀さんが動き出した。

side：銀次

「貴様もNo.のカードを…」

金造が驚いている。

「まあ、この力の代償が無いって訳じゃあない。」

そう言つて、俺は自分の灰色に変色した片目を指差す。

「このカードの影響を防ぐための手段はとつてあるさ。」

「貴様…何者だ？」

「しがない探偵さ、話はここまで。俺はトランス・デモンを召喚！更に効果発動！暗黒界の刺客カーキを捨て、攻撃力を500アップ！」

トランス・デモン ATK1500 2000

「暗黒界の刺客カーキの効果、手札から墓地に送られた時、相手モ

ンスターを一体破壊する。俺はクリムゾン・シャドーを破壊！」

「バカが、クリムゾン・シャドーの効果発動！オーバーレイ・ユニットを取り除き、忍者の破壊を防ぐ！」

クリムゾン・シャドー（oru21）

「なるほど、そういう能力か。なら問題ない。ブラック・ミストでクリムゾン・シャドーを攻撃！ブラック・ミストの効果、オーバーレイ・ユニットを一つ取り除くことで、攻撃対象の攻撃力を半分にし、その数値分アップする！」

クリムゾン・シャドー ATK 2400 1200

ブラック・ミスト ATK 100 1300

「ぬう…ならば、もう一度効果発動！」

クリムゾン・シャドー（oru10）

成金金造 LP 6400

「これで邪魔がなくなった。トランス・デーモンで成金忍者を攻撃！」

不気味な笑みを浮かべた悪魔が、忍者を切り裂く。

「俺はカードを伏せ、ターンエンド。」

四条銀次 LP 9100

手札 0 枚

「わ…わしのターン！わしはクリムゾン・シャドーを守備にし、モンスターをセット、カードを一枚伏せターンエンド！」「なら、そのエンドフェイズにサイクロン発動！お前の伏せカードを破壊する。」

「何！？」

破壊したカードはミラフォか、危ないな…

成金金造LP6400

手札一枚

「俺のターン、ドロー！強欲なカケラのカウンターが一つのる。」

強欲なカケラ（12）

「そして強欲なカケラの効果！カウンターが二つ乗ったこのカードを墓地に送り、二枚ドロー！」

四条銀次

手札3枚

「トランス・デーモンの効果で、俺は暗黒界の武神ゴールドを墓地に送る。ゴールドの効果、手札から墓地に捨てられた時、特殊召喚する。」

暗黒界の武神ゴールドATK2300

トランス・デーモンATK1500 2000

「終末の騎士を召喚。効果発動。デッキから闇属性のモンスターを墓地に送る。冥界の魔王ハ・デスを墓地へ！」

終末の騎士ATK1400

「更に、墓地の三体の悪魔を除外し、ダーク・ネクロフィアを特殊召喚！」

ダーク・ネクロフィアATK2200

人形を持った、俺のお気に入りのモンスターが現れる。

「なんだ、その気味の悪いモンスターは…」

金造が震えながら言う。「失礼な。こいつの良さが分からんか!!」
同意を求めようと、奏太達の方を見ると、

「嫌、こええよ。銀さん。」

「ひい...」

こんな反応が返って来た。畜生、泣きたくなってきた...

「と、とりあえず、ネクロフィアでクリムゾン・シャドーを攻撃！
念眼殺！」

ネクロフィアが、目を見開くと、クリムゾン・シャドーが燃えて消えた。やっぱりカッコいいと思うんだが...

「トランス・デーモンで伏せモンスターに攻撃！」

リバースモンスターは青い忍者。この状況じゃ無意味か。

「いけ！ゴールド、ブラック・ミスト！」

「ぐあああ!!」

成金金造LP6400 2700

「俺のターンは終了。さて、お前の力を見せてみる！」

「く、わしのターン!...このグズが！」

そう言つて、金造はカードを握り潰した。

「自分のカードを...」

「黙れ!わしの役に立たぬカードなどゴミ以下!こうして当然じゃ
!...」

醜く吠える金造。

「わしはターンエンド！」

成金金造LP2700

手札一(二)枚

「...俺は、お前に対して少し甘かったらしい。俺のターン!俺は、
魔法カード、受け継がれる力を発動!ゴールドをリリースし、その攻

撃力分の数値をネクロフィアに与える！！」

ダーク・ネクロフィア ATK 2200 4500

「攻撃力：4500！？」

「カードをグズ扱いするお前に、デュエリストを名乗る資格は無い！！行け、ダーク・ネクロフィア！！念眼殺！」

「ぐおおおお！」

成金金造 L P O

闘いの、幕が閉じた。

第2話 「No.」のカード（後書き）

初のデュエルパート、

いかがだったでしょうか？

忍者はこんなに弱くない！！と、思う方。今回はただのネタキャラ（名前的にも）なので、ご勘弁下さい。

何故か成金 上から目線 殿様 家来の忍者

という。図式が出来てしまつて…

ちようど忍者のNo.もあつたし。

次回は解決後、主人公達の謎に迫ります。

第3話 バカと家計と決闘者（前書き）

ようやくできました。

今回は、奏太のデュエルです。
パロが多めです。

第3話 バカと家計と決闘者

side：銀次

デュエル終了後、成金は捕まえられ、No.のカードも無事回収することができた。そして、いつもの日常が始まるはずだったが…。

「コーヒー、出来ました。」

そう言つて、俺の前にコーヒーを持ってくる緋色かなめ。

「…どうしてこうなった」

依頼が済み、俺達は緋色父が書いた手紙を読んだ。そこには、かなめに対する謝罪と…

『大変図々しいとは存じておりますが、まだ事情がありかなめを引き取る事ができません。どうかあなたの方でかなめの面倒をみてやって下さい。』

という内容が書いてあった。しかも断れないように弁護士雇つているらしい。あの狸め…。

幸いなのが、かなめが申し訳ないと感じており、家事を率先して手伝ってくれることか…。

「何このコーヒー、美味しいなああ!!」

奏太が大袈裟に驚いている。伊達に家政婦やってたわけじゃないのか。

「ほら、銀さんも飲んでみ！」

「その呼び方止めろ…っておいしいい！！そんなに砂糖注ぎ込むなあああ！！」

「ああ、ごめん。間違えちゃった」

「なんだその　はあああ！！」

「落ち着いて下さい銀次さん！　ってなんの事ですか！」

「ああ、済まない。つい頭に血がのぼって、訳のわからんことを…。」

「

どうも奏太といると、なんというか、調子が狂う。初めて会った時も…

「寝室にて」

「俺は、四条銀次。
よろしく頼む。」

「俺、奏太ってんだ、よろしくな。普通はさ、新入りは下って相場が決まってるんだけど、大丈夫。俺は、こだわらない。」

……………

と、二段ベッドの下の方を親指で差し、どこぞの囚人のような事を言っていた。後でわかった事だが、そもそもこいつは下のベッドの方が好きらしい。少しでも親切だなと思っていた俺がバカだった。

「そうだ、良い事思いついた。お前、俺のデッキとデュエルしろ。」

某アツー！漫画調の急な奏太の提案。

「何故だ？後、ネタ振られても乗らんぞ。」

「いやあ、かなめちゃんが、デュエルというものが見てみたい。って言ってたからさ。歓迎会も含めて。」

「今は無理だ。家計簿書いてるから。」

「家計簿って親かよ！」

「書き出した理由はお前の電気代が必要経費以上にかかって家計がピンチだからだ！」

「アニメ視聴、ネットゲは必要経費だ！」

「黙れ！しかも最近是有料課金しやがって！！ますます家計は火の車だよ！」

と、またテンションがおかしな方向に行きかけた時…

「雑賀奏太はいるかー！」

と、外から大声が響いた。

「やばっ…」

と言って奏太が隠れる前に玄関口が勢いよく開いた。

「どなたです？」

「私はデュエルアカデミア生徒指導部の古田です！雑賀奏太の指導に来ました。」

「」苦勞様です。奏太なら…」

と言いつつ、奏太を引っ張りだす。

「ちょ、待つ…。銀さんの裏切り者オオオオオ!!」

「誰が裏切り者だ。今回は何した？」

「ちょっとテストの点が低かったただけだっけ!!」

「ちよつとで教師が来るか!前だつて自分が窓割つたの備品の情報改竄して学校側の責任にしたのバレて呼び出し喰らつたる!!」

と言つて、奏太を教師の前につきだす。

「雑賀。お前のテストの点では、はつきり言つて留年だ。そこで、追試デュエルを行う!」

「へ…?デュエル?丁度いい、かなめちゃんも見てるといいよ!!先生、見学者つけていいですか?」

「ああ、いいだろう!」

「では、行きますよ!」

「デュエル!」

side:かなめ

古田康夫LP8000

手札5枚

雑賀奏太LP8000

手札5枚

「先行は僕が、僕のターン！」

奏太さんのターンランプが光り、奏太さんがカードを引く。一応一通りルールを教えてもらったけど…どんな戦い方があるんだろう？

「僕は、永続魔法、スライム増殖炉を発動します！カードを二枚伏せてターンエンド！」

雑賀奏太LP8000

手札3枚

モンスターをださない！？手札になかったのかな…？

「トークンか！俺のターン！俺はカードを二枚セット！そして、大嵐を発動！フィールドの魔法・罠を全て破壊！」

強風が魔法・罠を破壊していく。

「カウンター罠、魔宮の賄賂！先生の大嵐を無効にします！その代わり、先生は一枚ドローして下さい。」

「む…やるな！ドロー！」

古田康夫

手札4枚

「よし！俺は死皇帝の陵墓を発動！ライフを2000払い、古代の機械巨人を召喚！」

古代の機械巨人 ATK 3000

熱血そうな先生の場に、大きな巨人が出てきた。

「いきなり古代の機械巨人！あなたはなんて先生なんだ！」

いきなり先生を誉める奏太さん。

「誉めても何も出ないぞ。行け、古代の機械巨人！アルティメット・パウンド！」

雑賀奏太 LP 5000

大きくライフを削られちゃった。大丈夫かな…？

「俺はカードを一枚セットし、ターンエンド！さあ、お前の力を存分にはつきするんだ！」

古田康夫 LP 8000

手札1枚

「では遠慮なく。僕のターン、ドロー！スタンバイフェイズにスライム増殖炉の効果発動！スライムモンスタートークンを特殊召喚！」

スライムモンスタートークン ATK 500

「フィールド魔法、湿地草原発動！LV2以下の水属性の攻撃力が1200上昇します。」

スライムモンスタートークン ATK 1700

「永続罨発動、暴走闘君。このカードがある限り、攻撃力は1000上昇し、戦闘では破壊されません!」

スライムモンスタートークン ATK 2700

「ほう、やるじゃないか!だが、まだ足りないぞ!」

「まだまだ行きますぞ!装備魔法下克上の首飾りを発動!このカードを装備した通常モンスターの攻撃力は戦闘時レベルの差×500ポイントアップします!」

「なんだって!?!」

「行け、スライム!古代の機械巨人を攻撃!」

スライムモンスタートークン ATK 6200

え...?スライムモンスタートークンってもともと攻撃力500だよ
ね...?

「ぐう!」

古田康夫 LP 4800

「僕はカードを二枚伏せてターンエンド!」

雑賀奏太LP5000

手札0枚

「く…俺のターン！魔法カード、トレード・インを発動！手札の古代の機械巨竜を捨てて、二枚ドロ―！」

古田康夫

手札2枚

「カードを一枚セット、モンスターをセットし、ターンエンドだ！」

古田康夫LP4800

手札0枚

先生の方は動かないな…やっぱりあんなモンスターいたらキツイのかな？

「このまま決めてやるぜ！僕のターン！スタンバイフェイズ、スライムモンスタートークンを特殊召喚！」

スライムモンスタートークンATK2700

「行けえい！スライムモンスタートークンで伏せモンスターに攻撃！」

「罨カード、聖なるバリアミラーフォース！」「げっ！」

奏太さんのスライム達が全滅した。

「一枚のカードで戦況がひっくり返る。覚えておくんだな！」

「エクセレント！僕のスライムをこつも簡単に倒すなんて！」

奏太さんは飄々とした態度を崩さない。というか、先生に対して失礼な気が…

「はっはっは、よせよ。」

…気にしてないみたいだけど。

「僕は、ターンエンド！」

雑賀奏太LP5000

手札1枚

「俺のターン、ドロー！俺は死者蘇生を発動！甦れ、古代の機械巨竜！」

古代の機械巨竜ATK3000

「それはまずい、畏発動、奈落の落とし穴！古代の機械巨竜を除外！」

「なに！？」

「俺はターンエンド！来いっ！雑賀あ！」

古田康夫LP3800

手札0枚

「……僕のターン、ドロー！スタンバイフェイズ、スライムモンスタートークンを特殊召喚！」

スライムモンスタートークン ATK2700

「僕は、アームズホール発動！デッキトップから一枚墓地に送り、下克上の首飾りをデッキからサーチ！バトル！スライムで伏せモンスターを攻撃！罨発動！ストライク・ショット。モンスター一体の攻撃力を700上昇し、貫通効果を与える！」

スライムモンスタートークン ATK3400

「セットモンスターはマシュマロンだ！」

マシュマロン DEF500

古田康夫 LP1900

「くっ…、マシュマルンの効果、セットされたこのモンスターを攻撃したプレイヤーに1000ポイントのダメージを与える！」

「うわっと！」

雑賀奏太 LP4000

「僕は、もう一枚スライム増殖炉を発動しターンエンド。」

雑賀奏太 LP4000

手札0枚

「俺のターン！ドロー！」

先生がドローしたカードを見る。

「（セットカードは雑賀のデッキ相手じゃ余り使えないな。）俺はモンスターをセット、ターンエンド！」

古田康夫LP1900

手札0枚

「僕のターン、ドロー！…スタンバイフェイズに二体のスライムモンスタートークンを特殊召喚！」

スライムモンスタートークン×2 ATK2700

「だが！こちらには戦闘破壊耐性を持つマシュマロンがいる！このターンでは決着はつかない！」

「…それはどうか？僕は、速攻魔法、エネミーコントローラーを発動！一つ目の効果によって、マシュマロンを攻撃表示に変更！」

マシュマロン ATK300

「とおどおめえだー！スライムでマシュマロンに攻撃！」

「うおおお！」

古田康夫LP0

「……………なあぜだああ!」

外から奏太さんの悲鳴が聞こえます。

デュエルが終了し、追試から解放されたと思っていた奏太さんだけでなく、先生曰く

「このデュエルは留年をかけた物で、まだ補習をしてもらう必要がある。さあ、先生と楽しく一対一の勉強会だ!」

だ、そうです。

「嫌だ、僕は、うけたくないいい!」

と、危うく鬼になりそうな声で抵抗していた奏太さんですが、

「うつせえ!また家計簿の計算ミスったじゃねえか!」

と、鬼のような顔をした銀次さんが奏太さんに打たれ、ぐったりとしたまま連れていかれました。最初は落ち着きのある、少し近寄り難い人達だと思っていましたが、私を嫌な顔一つせず家に招いて下さり、優しい方々でした。

「ええっと、この費用が…はあ!?あいつまた有料課金を…ああもう!」

……もう少し、もう少し落ち着きのある方だと思ってました。

第3話 バカと家計と決闘者（後書き）

二回目のデュエル、
どうでしたか？

今回出てきた古田教諭は 【死皇帝の陵墓＋クロノス】
です。ちなみに、

伏せてあったカードは

黄金の邪心像×2

禁じられた聖杯
です。

前者は大嵐無効＋サイクロンが来ない
後者はトークンだったから意味なし
で、完全に死に札でした。

奏太は【トークン】ですが、【スライム増殖炉】寄りです。
使い方

強化して貫通つけて

殴る。

魔法、罫はカウンターで守る。

今回のデュエルも間違いなどありましたら指摘お願いします。
感想もお待ちしております！

第4話 日常と異変（前書き）

今回は、新キャラ登場回＋次回への伏線です。

デューエルはありません。

第4話 日常と異変

side：奏太

僕と古田教諭の壮絶な（？）補習が終わり数日、僕はある重要な仕事をこなしていた…

「よし！トリシュ5万でらくさ…あいたあっ！」

「お前のデツキで使わねえだろーがあああ！！」

銀さんが思い切り僕の頭を叩く。

「痛いよ！！依頼はどうしたの？」

「さっき終わらせて来た。今回はNo・絡みじゃあなかったしな。すぐに済んだ。」

あれ、浮気調査だったよね？速くね？

「そんなことより、トリシュだよトリシュ！？いざという時にどんなデツキにも入るのに！！」

「都合の良いこと言ってんじゃねえ！絶対コレクション目的だろ！そもそもお前のせいで金がねえんだよ！！」

「これだけは譲らないよ！！」

僕にだってプライドってものがある。

「…臓器ってさ、ある程度売っても大丈夫らしいぞ？」

「すみませんいやごめんなさい。」

この男…やると言ったら マジでやる『淒み』がある…。

「そういえば、かなめは？」

「なんでも、アカデミア編入の手続きだとか。今は長期休暇中だから、新年度から編入するんだって。学費はかなめちゃんの父さん持ちだって。」

「へえ？あの狸もそれなりの気遣いはあるのか。」

銀さんもかなめちゃんの事気にしてたみたいだから良かった良かった。

さて、僕はブログの更新でもするか。

side：銀次

「じゃ、俺は買い物行ってくるわ。」

「まじで！？じゃ、限定フィギュ「黙れ」ひどい！！」

いい加減こいつの変な趣味は直らないのか。見た目は女の子のような繊細な顔立ちなのに、妙な事に興味を示す変わり者だ。

商店街に着くと、俺は顔馴染みのいる八百屋に行くことにした。

「おう！銀次じゃねえか！！奏ちゃん元気か？」

と、威勢の良い声で呼び掛けてくるのは高校時代の同級生である
設楽 譲二だ。こいつは、見た目こそ強面だが、子供好きで優しい

男だ。忙しい時は、まだ小学生だった奏太の面倒を見てもらっていた。今は家業を継いで八百屋をやっている。

ちなみに、いまだに奏太のことを女の子だと勘違いしている。ちなみに、いまだに奏太のことを女の子だと勘違いしている。

「おう、あいつは憎たらしい位に元気だ。いつものくれ。」

「あいよ。やっぱ女の子はそれくらい元気じゃないとな。」

「だから、あいつは男だ。」

「ははは、今日はエイプリルフルじゃねえぞ。」

冗談を受け流すように笑いながら、いつもの野菜を受け取る。

「いいのか？そいつらは形が悪くて売れなくなった野菜だぜ。なんだったらタダでやるけど。」

「味は変わらんしいさ。半額にしてくれるだけありがたい。」

「お前、なんか主夫してるな。」

「失礼な。まだまだ21だ。」

まだここら一帯はこういった野菜に対して偏見を持っている人が多い。

おかげで家計に大助かりだが。

「ま、買い取り手が無くて困ってたんだ。ありがとよ。今度は奏ち

やん連れて遊びに来い。うちの家族が喜ぶから。」

「ああ、また今度な。」

世間話もそこそこに、譲二と別れる。

遊びに来い、か。奏太は女の子扱いされるのを嫌がるからな。いい加減、慣れればいいのに。

しかし、今日は平和だなあ…。

side：かなめ

転入手続きが終わり、私に一つ問題があることに 気付きました。

「試験用に、デッキ組まないと…」

私が転入するのは、奏太さんと同じデュエルアカデミア。父様からは十分な学費を頂いていますが、なるべく残しておいて銀次さん達の助けにしたい…そこで、成績次第では格安で通う事のできるデュエルアカデミアを選びました。あそこなら、将来的に有利な仕事にも就けるはずです。

しかし、自分のデッキを持ってない。父様が残していったデッキがあるのですが、デュエルアカデミアは狭き門…。私でも 使いこなせるよう調整をしておきたいのです。

うんうんと考え込んでいると、

「…大丈夫か？何か悩みがあるなら、相談に乗るぜ！」

と、元気な声が聞こえました。顔をあげると、

髪の高い、元気そうな女の子がいました。

「えっと、実は…」

普段、余り人に弱音を吐かないように努めていたつもりですが、この子の前では隠し事が出来ませんでした。

「なるほど…カードが足りないと。わかった！あたしのカードをあげるよ…！」

余ったやつだけ…と 照れ臭そうに頭をかいている彼女に、

「あ、ありがとうございます！私、どうしたら良いかと…」

つい嬉しさの余り、泣きそうになってしまいます。

「良^まいって良^まいって！じゃ、あたしの家に行こうよ！！私は興^き野^{やう}真子^{まこ}！よろしく！」

「私は、緋色かなめと申します。こちらこそ、よろしく願いします！」

そう言^いって、私は真子さんと一緒にデッキ調整をしました。

「さて、と。」

今までまとめた情報を総合し、呟く。

「間違いないなあ。ここ最近、妙に勝ち星を挙げているプロデュエリスト、No.持^もちだ。」

そう言いパソコンの画面を見つめる奏太の目は情報屋の目だ。

「問題は、どうやって近づくか…かな。とりあえず、銀さんに報告だ。」

そう言い、メモを取る。 最近連勝しているプロ、 興野凧の名前を…

第4話 日常と異変（後書き）

今年最後、初の日常回です。
どうだったでしょうか

最後の名前はミスではありません。次回、重要な役割を持って登場します。（多分バレバレですが）

感想、ご指摘お待ちしております。
では、皆さん良いお年を！

第5話 偽りの希望（前書き）

明けてましておめでとう
ございます！！

今年も、遊戯王PSをよろしくお願いいたします。

アクセスPV1000突破！！
ありがとうございます！！

第5話 偽りの希望

Side: かなめ

「このカードはどう?」

「では、こっちのカードを抜いて…」

現在、私達は興野さんの家でデッキ調整をしています。

「……出来ました!ありがとうございます!」

「いいっていいって!とりあえず、試しにデッキ回してみようよ!」

それから、暗くなるまでデュエルの相手をして頂きました。

「もうすっかり暗くなったね」

「あ、すみません、こんな遅くまで…」

「あたしは良いけど、かなめの帰りが…そうだ、兄貴!」

と、興野さんが隣の部屋に声をかけると、優しい雰囲気の人のがやって来ました。

「この子、家まで送って欲しいんだけど。」

「いいよ。デッキ調整も煮詰まってきたことだし。」

「そんな…そこまで迷惑かける訳にはいきません！」

「いって。そんなことよりうちの兄貴、プロなんだぜ！何か参考になると思うし、一緒に行こうよ！」

自分の兄を誇らしく語る興野さんを見ると、少し微笑ましく思うのと同時に、羨ましく感じました。

「では、お言葉に甘えて…」

それから、私は車内で色んなお話をしながら家…銀次さん達が待っている探偵事務所に着きました。

「何から何まで、ありがとうございました！」

「ああ、これからはプロデュエリスト、興野きょうの 凧なぎをよろしく。」

と、冗談めかして興野さんのお兄さんは去っていきました。

side：奏太

「……という訳なんだ。銀さん、プロに知り合いいる？」

最近見つけたNo.の情報。僕は銀さんと今後の方針を話し合っていた。

「その呼び方止める。プロか…俺の人脈じゃ、どうにもならんな。」

銀さんも悩んでいる。確かに、僕も銀さんも情報を集めるために、裏の人間との関係を重視してきた。あまり表舞台のスター達とは縁がない。

「しょうがない、裏から情報を集めて徐々に接近していくか。」

銀さんは前に成金相手に使った方針を提案する。良い案なんだけど、金と手間がかかるんだよね。

前はかなめちゃんの父さんからの報酬が多かったから出来たけど。そういえば、かなめちゃんは？

「すみません、遅くなりました！」

「あ、おかえり〜随分遅いけど、どうしたんだい？」

「試験の為にデッキ調整をしてて…」

そういえば、入学試験ってあったなあ。懐かしい。

「興野さんという親切な方々に手伝ってもらいました。今度紹介しますね。」

「「興野!?!」」

僕と銀さんが驚き、かなめちゃんがビクツと体を震わせた。

「興野：風はいたか？」

「はい！私を手伝って下さった方のお兄様で、プロデュエリストさんなんです!!」

銀さんの質問にかなめちゃんが嬉しそうに答える。言いづらいなあ…。

「あー、その風って人はね、N o ・持ちの可能性が高いんだ。覚えてるかい？成金との一件。」

「そんな…。嘘です！！風さんがN o ・なんてカードを持つてるはずがありません！」

ショックを受けているかなめちゃん。まあ、恩人とあの小物が同種とは信じられないかな。

「言いくいが事実だ。N o ・は心の闇につけこみ、精神的に影響を与える。」

最近、興野風とデュエルした人間は、皆希望を失い、心が折れてしまっている。」

銀さんは淡々と語る。

「……信じられません。」

そう言い残し、かなめちゃんは自分の部屋に行ってしまった。

side:風

「はあ、はあ。くっ…」

衝動が押さえられない。このカードを手にして以来、負ける事が一切なくなった。しかし、相手を容赦なく叩きのめしたい、という衝動が僕を襲うようになって来た。

僕は今の自分が怖い。

真子でさえも絶望に叩き落としてしまいそうで…

「ははは、大部イイカンジに汚染されてんじゃないすかあ？」

いきなり背後から声がしたと思うと、後ろに高校生くらいの男が立っていた。ただ、その目の色は赤黒く濁っている。

「だ、誰だ君は!？」

「俺はトライ。なんて言うンすかね…? N o . カードを自在に操る者?」

そう言つて爆笑をする男。正気か？

「N o . を操る? どういう事だ!？」

「なに、簡単なことサ。誰かにその衝動を思い切りぶつけてやればいいンすよ。それなりに強い人間にねえ？」

それなりに強い人間…。 僕の頭に一人の少女が浮かびあがる。

「かなめつて結構強いんだぜ! あたしなんか途中から全然勝てなかったよ。」

そう嬉しそうに話す真子を思い出して胸が痛んだが、仕方ない。

「一人いた…かなめという人間が…。」

例え真子に軽蔑されても構わない。僕の…いや、俺の家族を守る為の、希望を離さないために。

side:???

「上手くいったッすよ」

「そうか、ご苦労様。」

「でも、なんでN.O.を回収しないンすか？」

「バカが、何回聞いたら理解するんだ？」

ツヴァイが怒鳴る。

「落ち着け、ツヴァイ。N.O.の回収しないのは、憑依された人間から可能な限りエネルギーを吸収するためだ。それが一番効率的に我らの目的を果たす手段だ。」

「まワリくどいッすね」

「他に方法が聞き出せなかった以上しょうがない。あの男、つまりん意地を張って自ら闇に飛び込んだからな。」

「どんな奴でしたっけ？」

「確か…雑賀とか言ってたな、ツヴァイ？」

「はい、雑賀仁朗。裏の情報屋でしたね。」

第5話 偽りの希望（後書き）

今回は次回、これからの
伏線です。

次回からいよいよ主人公達の過去に迫っていきます。

正月記念回 新年前夜／探偵の掃除（前書き）

今さらながら、正月特別偏です。ぎりセーフですかね？

正月記念回 新年前夜／探偵の掃除

Side：銀次

「だーから、掃除しろつつてんだろぅがぁ！」

「へぶっ！？」

昔のオモチャを引っ張り出して遊んでいる奏太を殴る。

「銀次さん、すいません。つい出来心で…」

おや？今回こいつは嫌に素直だな。

「わかった。今からは掃除しような？」

「いやっすいやっす、絶対イヤッス！！…ちよっ、無視しないでえー！」

…反省。こいつが素直な訳がない。某賭博漫画の屑野郎の真似しやがって。

「銀次さん。この辺りのゴミどうしましょうか？」

「ああ、悪い。置いといてくれ。後で俺が奏太も一緒にだしてくる。」

「あれ！？僕ゴミ扱い！？」

今、俺達は新年に向けて大掃除をしている。全く働かない奴がいるが、かなめという強力な助っ人もいて、かなりはかどっている。

「うわあ、僕のコレクションが雪崩になって…うわあああ!!」

……訂正。働かない、じゃなくて妨害する、だ。

……
「おわった〜!」

結構なゴミの量で、手間がかかりもう夕方になっていた。

「いや〜こんなにキレイなのは引っ越して以来だね!」

「お前少しは働けよ!!」

「そう言えば、まだお二人の時って、どうやって掃除したんですか?」

この質問…悪意はないよな?

「ああ、俺と譲二のデュエルで負けたほうが掃除してた。」

「譲二さんって…?」

「昔の友人さ。」

side: 銀次、高校時代

「うし、今からデュエルして負けたほうが勝った方の家を掃除な!」

「いや…奏太は？」「女の子に重いもん持たせられねえ！！」

まだこいつ奏太の事女だと思ってるよ…。

「お兄ちゃん、がんばって」

ちくせう。奏太、覚えてやがれ。

「くそ、こんな広い家やってられるか！！絶対に負けねえ！」

「デュエル！！」

四条銀次LP8000

手札5枚

設楽譲二LP8000

手札5枚

「先攻は俺だ！ドロー！俺はキラートマトを召喚！！ターンエンド！！」

設楽譲二LP8000

手札5枚

「俺のターン！ドロー！俺は、マッドデーモンを召喚！！魔法カード、墮落！これにより、キラートマトのコントロールを得る！キラートマトで攻撃！」

設楽譲二LP6600

「だが、この瞬間、トラゴエディアを特殊召喚！！トラゴエディア

の攻守は手札の枚数の600倍だあ!!」

設楽譲二

手札4枚

トラゴエディアATK2400

「ちつ、ならバトルフェイズは終了。俺は、キラートマト、マッドデーモンの二体をオーバーレイ！エクシース召喚！！インヴェルズ・ローチ！」

インヴェルズ・ローチATK1900

「出た！銀次さんのエクシースコンボだ！」

お前はどこの取り巻きだ、奏太。

「俺はカードを二枚伏せターンエンド！」

四条銀次LP8000

手札2枚

「エクシース召喚？それ仁朗さんのカードじゃ……」

「掃除回避の為、ちょっと拝借してきました。」

「うおい……とりあえず、俺のターン！俺はカードをセット！巨大ネズミを召喚！！カードを伏せ、ターンエンド！」

設楽譲二LP6600

手札2枚

「なにをするつもりだ？俺のターン！バトル！インヴェルズ・ローチで巨大ネズミに攻撃！」

「畏発動！スピリットバリア！モンスターがいるかぎり、俺は戦闘ダメージを受けない！そして、巨大ネズミの効果で再び巨大ネズミを召喚！」

「なんだそのデッキ！俺はモンスターをセット、ターンエンド。」

「今に分かるさ。俺のターン！UFOタートルを召喚！巨大ネズミでローチに攻撃！効果で巨大ネズミ！もっかい攻撃！効果で素早いモモンガ！（以下略）カードを二枚伏せて、ターンエンド！」

さて、一回状況を整理してみるか。

設楽譲二LP7600

手札0枚

場 軍隊竜、素早いモモンガ（裏）×2、トラゴエディア

魔法・罫 スピリットバリア 伏せ×2

除外 0枚

墓地 9枚

…かなり厄介な状況だな。しかし、相手のデッキのコンセプトが良
く分からんな。

「俺のターン、ドロー！（俺の二枚の伏せはヘイト・バスターと終
焉の焰。相手の目的が分からん以上、うかつには使えんか…）俺は、
ジャイアント・オークを召喚。ジャイアント・オークで軍隊竜を攻
撃、手札から速攻魔法サイクロン発動。スピリットバリアを破壊！」

「それにチェインしてスピリットバリア！軍隊竜は破壊されるが、ダメージは0だぜ！」

「二枚目か：ローチでトラゴエディアを攻撃。ターンエンド。」

四条銀次LP8000

手札1枚

「俺のターン！二体のモモンガを反転召喚！二体でローチを攻撃！モモンガの効果で合計2000回復！」

設楽譲二LP9600

「モンスターをセット、ターンエンド！」「エンドフェイズに終焉の焰発動！黒焰トークンを二体特殊召喚！」

黒焰トークンATK0

設楽譲二LP9600

手札0枚

「俺のターン、ドロー！黒焰トークン二体をリリース、ヘル・エンプレス・デーモンをアドバンス召喚！」

ヘル・エンプレス・デーモンATK2900

「ヘル・エンプレス・デーモンでセットモンスターを攻撃！女帝の一括！」

「セットモンスターは魔道雑貨商人。効果発動！」

「こいつはデッキの上からモンスターカード以外のカードが出るまで、何枚でもドロし墓地に捨てるカード。そして魔法・罠が来た時、手札に加えることができる！！」

いや、なんで奏太が解説してんだよ。そのセリフじゃ、俺が蟲野郎みたいじゃないか。（ローチいるけどさ。）後、できるじゃなくて強制効果な。

「さあいくぜ！まず一枚目！」

譲二もノリノリだな。

「ドロー！ジャイアントウィルス、グリズリーマザー、ライコウ、メタモルポッド、キラートマト、シャインエンジェル、コーリング・ノヴァ、ジャイアントウィルス、ジャイアントウィルス、カオスポッド、コーリングノヴァ、大王目玉、グリズリーマザー、冥府の使者ゴーズ、シャインエンジェル、大王目玉、キラートマト、悪魔の偵察者、千年の盾、マシユマロン、…残骸爆破か。かなり引いたな。」

リクル特攻＋残骸爆破か！しかし、なんて運してるんだ。普通のサポートカードを引いてしまうもんだが。とりあえずあいつの墓地は…？

墓地 36

もう発動圏内か…

「俺は、ターンエンド。」

四条銀次LP8000

手札1枚

「ふふふ、俺のターン！俺はカードを二枚伏せ、ターンエンド！」

設楽譲二LP9600

手札0枚

「くっ…！俺のターン！俺は、「その瞬間に罠カード、残骸爆破2枚発動！合計で6000ダメージだ！」マジかよ！」

四条銀次LP2000

「…俺はジャイアントオークを攻撃表示に変更。ヘル・エンプレス、ローチ、オークで攻撃！」

設楽譲二LP2600

「くっ…だが、次におれが残骸爆破を引けば俺の勝ちだ！」

こいつの強運だと、マジで引きそうで怖い。

「…俺は、二枚のカードを伏せ、ターンエンド。」

四条銀次LP2000

手札0枚

「俺のターン、ドロー！…俺は貪欲な壺を発動！墓地から巨大ネズ

ミミ三、軍隊竜二体をデッキに戻し、二枚ドロ―！」

設楽讓二

手札2枚

引いた瞬間、讓二の口角が釣りあがる。

「俺はカードを二枚伏せ、ターンエンド！」

「俺のターン！」

「畏発動！残骸爆破！」

「くっ…カウンター畏、魔宮の賄賂！」

「なんだって！？これじゃ俺の…なんてな。カウンター畏、カウンターカウンター！カウンター畏の発動を無効にする！！俺の勝ちだ！！！」

「…それはどうかな？カウンター畏、神の宣告！ライフを半分払い、お前のカウンターカウンターを無効にする！よって魔宮の賄賂は成立、残骸爆破は無効だ。行くぞ、ヘル・エンプレス・デーモンでダイレクトアタック！女帝の一括！！！」

設楽讓二LP0

「ちくしょー、俺の負けか。」

「いや、かなり危なかった。で、約束だ。俺らの事務所を掃除して

もらおうかぁ！」

「おい、銀次。」

後ろから、声がする。まさか…

「し、仁朗さん…。」

「お前、俺のカード勝手に使ってんじゃねえええ！」

「痛い痛い！関節がイカれるううう！」

その後、結局俺達は大掃除より辛い目に会った。

「…って感じた。」

「あの時の銀さんの焦りよう…ププ」

「でも、今も付き合いのある友人がいるって言うのは、素敵ですね！」

「ああ、そうかもな。よし。久しぶりに呼んでみる「おじやましませう！」っては？」

「ちょっと遊びに来たぜ」ほれ、年越し蕎麦の材料！」

「ほれって…俺が作る前提かよ！！！」

「硬いことゆうなよ、銀さん。」

「お前が言つな!!」

「ふふふ。」

いつもにまして騒がしい年末。いつか仁朗さんも 連れ戻せたら…。

おまけ：初詣

銀「俺は小吉。…えっと、誰かに振り回される？はあ…」

か「私は中吉でした。」 譲「俺は大吉だぜ!…奏ちゃんはどつした？」

奏「凶：自重しろ？おいおい、僕はいつも物静かに…あっ！お土産屋に萌えキャラが!!」

（（早速自重してない…）（））

正月記念回 新年前夜／探偵の掃除（後書き）

特別偏 どうでしたか？

主人公の過去は暗い所が多い予定なので、明るい所を書いてみました。

感想お待ちしております！

第6話 疑心と邂逅（前書き）

今回のデュエルは、
二段構成にしてみました。
物語が動き出します。

第6話 疑心と邂逅

side：奏太

え〜っと…

なにこの気まずい状況？

「……………」

「……………」

僕が起きて朝食を食べに机に向かうと、
かなめちゃんと銀さんが無言で朝食を食べていた。

そもその始まりは、昨日銀さんが興野凧をNo.持ちだと言った事だ。友達の兄を信じたいかなめちゃんは珍しく真っ向から反対した。

仕方ない、僕が話題を作るか！

「あ、これ、いい米だ…ね。」

「昨日と変わらねえよ。」

なんで米！？僕は馬鹿か！ネタの神よ僕に力を！！
なんて考えてると、突然電話が鳴り出した。

「はい。もしもし。……はい、わかりました！！」

かなめちゃんが応答する。電話とるの速いなあ。

「なんの電話だったの？」

「凧さんが、私の入学試験の為にデッキ調整に付き合ってくれるっ

て！」

ああ、眩しい笑顔だ。もうN.O.とかいいじゃない。だってかなめちゃん、とても幸せそう……

「銀次さん、私、あなたが何て言っても行きますから！」

「おう、行ってこい。ただし、泣くんじゃねえぞ。」

売り言葉に買い言葉、って言うんだっけ？かなめちゃんは少し怒りながら支度して出ていった。

「銀さん、いくら何でもおとなげ無いよ！いくら何でも女の子を危険な所に向かわせるなんて！」

「なに言ってたんだ。俺はそんなガキみたいな事しない。かなめを今から尾行する。風になにか不審な動きがあつたら俺達が出てデュエルすればいい。いわゆる図捜査だ。」

なるほど、それならかなめちゃんの誤解も解けるし、相手も簡単にN.O.を出すかも知れない。

「さすが銀さん！僕に思い付かない事を平然とやってのけるう！そこにシビれる、憧れるう！」

「馬鹿言っでないでさっさといくぞ。」

それから僕達は変装しながらかなめちゃんを追った。しかし、この変装グッズ、銀さんの趣味かな？

銀さんはシルクハットと杖に、黒いコート。

僕は水色のハンチング帽とカーディガン。

まるでどこぞの英国紳士みたいだ。ああ、周りの目が痛い！

side：ツヴァイ

たつた今、私は偉大な使命の為障害となる二人を観察している所だが…。なんだあれは？あの二人の衣装、こすぶれ、という奴か？妙な服を着ている。

「おい奏太、かなめが興野凧と路地裏に移動している！」

「待つて銀さん！この服もつやだよ！悪目立ちしてるよ！」

「それどころじゃあない！急ぐぞ！！」

雑賀仁朗の息子：私は分かるぞ。その気持ち…
つてそんな場合じゃなかった！！

「待て！彼の邪魔をさせる訳には行かない！」

私は二人の前に立ちふさがった。

side：銀次

俺達がかねめを追おうとした瞬間、

「待て！彼の邪魔をさせる訳には行かない！」

と、凧とした声が聞こえた。振り返ると、そこにはスーツを着た女性立っていた。

「…………お前は？」

「私はツヴァイと呼ばれる者。訳あつて貴様達を通す訳にはいかん！決闘だ！」

妙に古風な喋り方だ。

「断る。デュエルをして、なんの得がある？」

「ほお、言つじゃないか。四条家の失敗作が。」

「！！…お前、何を知っている？」

誰にも、仁朗さんにさえ俺の家の事は話していない。何故四条の家の計画を知っている？

「さあな。それが知りたければ、私との決闘を受けろ！」

「ちっ…奏太、先に行け！」

「おっと、通さんと言っているだろう？」

奏太の周りに闇の、人形のような物が立ち塞がる。こいつ、何者だ？

「わかった、デュエルを受けよう。」

「「デュエル！！」」

side：かなめ

全く、銀次さんの言う事は信じられません。

No.のカードを持っているなら、私の元養父、成金金造のように自らの欲望をコントロールできない状況に陥るはずです！

でも凧さんは、今日も私のデッキ調整に付き合って下さると…
そして何より真子さんのあの笑顔が凧さんが優しい人であると物語
っています。

「じゃあ、始めようか。」

「はい！」

ここは、人通りの無い路地裏。あまり人の迷惑にならない様にと凧
さんがここにしました。

「「デュエル！」」

緋色かなめLP8000

興野凧 LP8000

「先行は譲るよ。」

「はい！私のターン！私はモンスターをセット、カードを一枚伏せ
てターンエンドです！」

緋色かなめLP8000

手札4枚

「僕のターン、ドロー！僕は、イエローガジェットを召喚！」

イエローガジェットATK1200

「効果で、デッキからグリーンガジェットを手札に加える。バトル
！イエローガジェットでセットモンスターに攻撃！」

「罨カード、くず鉄のかかし！相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にして、再セットします！」

「なるほど、カードを二枚伏せ、僕はターンエンド。」

興野凧 LP 8000

手札4枚

「私のターン！チューナーモンスター、トップランナーを召喚します！」

トップランナー ATK 1100

「さらに、チューニングサポーターを反転召喚です！チューニングサポーターは、シンクロ素材とする時、レベル2として扱えます。

レベル2のチューニングサポーターにレベル4のトップランナーをチューニング！集いし星が、思いを繋げる鎖となる！シンクロ召喚！！C・ドラゴン！」

C・ドラゴン ATK 2500

「チューニングサポーターの効果で一枚ドロ！」

緋色かなめ

手札5枚

「バトル！C・ドラゴンでイエローガジェットを攻撃！」

「罨発動、デモンズ・チェーン！これでC・ドラゴンは攻撃と効果を封じられる。」

「そんな！…私は、カードを伏せてターンエンドです…。」
「いやあ、緋色さんはすごい才能の持ち主だ！とても昨日今日始めたとは思えない！」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

「その才能が……………妬ましい。」

「えっ？」

「……………何でもないよ。僕のターン。グリーンガジェットを召喚。効果でレッドガジェットを手札に。更に血の代償を発動。LPを50払ってレッドガジェット。効果でイエローガジェットを手札に。」
興野凧LP7500

「更に500払ってイエローガジェットを召喚。効果でグリーンガジェットを手札に…イエローとレッドでオーバーレイ。ジェムナイト・パール。」

興野凧LP7000

ジェムナイト・パールATK2600

凧さんが鬼気迫る勢いで展開しています。何かを振り払うように…

「バトル、ジェムナイト・パールでC・ドラゴンを攻撃。」

「畏発動、くず鉄のかかしです！」

「グリーンガジェットでC・ドラゴンを攻撃。速攻魔法、リミッタ

「解除！機械族の攻撃力は二倍になる！」

しまった！そちらが狙いでしたか！

グリーンガジェット ATK 2800

「うう…」

緋色かなめ LP 7700

「続いてイエローガジェットで攻撃！」

「させません！罠カード、トゥルース・リイン・フォース！デッキからマツシブ・ウォリアーを特殊召喚します！マツシブ・ウォリアーは一ターンに一度、戦闘で破壊されずダメージを受けません！」

確かにリミッター解除はエンドフェイズに機械族を全て破壊する効果があるはず…。

「まだだ。グリーン、イエローでオーバーレイ！希望の皇よ、矛となり盾となれ！エクシーズ召喚！！No.39 希望皇ホープ！」

No.39 希望皇ホープ ATK 2500

「嘘…なんで…？」

「君には悪いけど、俺の、俺の妹の為に犠牲になってもらう！カードを一枚伏せ、ターンエンド！」

興野凧 LP 7000

手札 4 枚

私は、風さんの変貌に驚愕することしか出来ませんでした。

side：銀次

「な…なんでそのカードを…！」

目の前で起きていることが信じられない。何故、こいつがあのカードを…

「ふん、やはり失敗作か。つまらんな。この程度の紛い物にしてやられるとはな。」

俺のフィールドは突然出てきたあの怪物に蹂躪されていた。

「そんなことはどうでもいい！何故お前が四条家の計画の集大成の一枚を持っている…！」

俺はツヴァイのモンスターを指差し怒鳴る。

暴力的だが、どこか神々しい、天空を司る深紅の神

オシリスの天空竜を

第6話 疑心と邂逅（後書き）

いかがだったでしょうか？

オシリスOCG化が嬉しくてつい出してしまいました。

次回、主人公の過去が明らかに…？

第7話 光さす道（前書き）

今回のデュエルは、ストーリーの都合上、途中経過を省いたものがあります。

後、私の文才が欠如しているため、熱い展開になっておりません。脳内BGMをかけて読んでもらえると、幸いです。

ちなみに、私は遊星のテーマ（勝ちフラグのやつ）をイメージしております。

第7話 光さす道

Side：銀次

「なぜ、この程度が出来ない。」

自分に冷たく問う父さん。 僕の身体が所々悲鳴をあげている。

「所長、四条銀次は心身共に限界です。やはり、改造を施したとはいえ、生身の人間が神を扱うのは…」

父さんの横で女の人が話しかけている。

「だが、これには多少の特別に耐性を持たせる事が出来た。」

父さんは僕をもの扱いした。 僕って…

「ですが、その特別を使用するたび、副作用が身体に生じております。」

そう言つて、女の人は僕の変色した片目を指さす。

「……わかった。これを捨てておきなさい。」

僕は知らない場所に連れていかれた。

それから、俺は仁朗さんと出会った

……
神、オシリスの天空竜を見て、昔を思い出す。

「どうした、やはりこの程度か！私はターンエンド！」

ツヴァイLP1500

手札4枚

「…いや、昔を思い出してな。俺のターン！神とは言え、そいつは所詮模造品だ！俺はそいつを乗り越える！」

過去を、乗り越える為に。

「俺は、クリボー、暗黒界の軍神シルバ、冥界の魔王ハ・デスを除外！ダーク・ネクロフィアを特殊召喚！！」

「だが、オシリスの効果発動！召雷弾！」

ダーク・ネクロフィアATK200

「畏発動！暗黒の謀略！お互いに手札二枚を捨て二枚ドロー！だが、お前は手札を一枚捨てる事で無効にできる！さあ、どうする？」

「（奴はまだ召喚権を残している…。もし3000を超える手段が奴の手札にあれば、オシリスは破壊される…。）良いだろう、その効果を使うが良い！」

「わかった。では二枚捨てて二枚ドロー！」

ツヴァイ4枚

四条銀次3枚

「…………更に、手札抹殺を発動！」

「何！？」

「俺は二枚捨て二枚ドロー。お前は四枚捨てて四枚ドローしろ！」

「くっ…貴様何を…！」

「そして、手札から捨てられた暗黒界の術師スノウの効果で、デッキから暗黒の門を手札に加え、発動！悪魔族の攻守は300上がる！」

ダーク・ネクロフィア ATK 500

「装備魔法、レインボー・ヴェール！これで、ネクロフィアとバトルを行うモンスターの効果は無効になる！」

「つまり、オシリスの攻撃力は…！」

「0だ！いけ、ネクロフィア！念眼殺！」

「馬鹿な！我が神が…！」

ツヴァイ LP 500

「俺は、ターン、エンド。」

四条銀次 LP 200

手札 0 枚

神は倒せた。しかし、手札は0。ライフも残り僅か。対してあいつはフィールドはがら空きだが、手札は四枚もある。

「神を倒したはいいが、ここまでのようだ。私の　おや、緊急命令か。時間も稼げたようだし…命拾いしたな、失敗作！」

ツヴァイは憎々しげに俺に言い、去っていった。確かに、命拾いした。俺はただ神を倒し、憂さ晴らしただけだ。これでは、過去を乗り越えられなかった…

「銀さん！」

「ああ、奏太、急いでかなめの所へ…行ってくれ…。俺も少ししたら…行く。」

我ながら弱々しく呟いた。しかし、奏太は察してくれたのか、かなめの所へ走り出した。

奏太を見届けた後、俺の意識は薄れていった。

side: 凧

「カードを伏せ、俺はターンエンド！」

一つ、重大なミスをした。あのバトルフェイズ、マッシュ・ウォリアーは破壊出来たはず。何故しなかったのか？罪悪感？下らない。ただのミスだ。

興野凧LP7000

手札4枚

「…わ、私のターン。私はモンスターをセット。ターンエンド…です。」

緋色かなめLP7700

手札4枚

彼女は意気消沈している。可哀想だが、俺や真子の為にも犠牲になつてもらう！

「……どうして、どうしてNo.なんてカードを！！」
突然彼女は叫んだ。

「簡単なことさ。プロなんて聞こえはいいけど実際は勝てないとゴミ……。僕はそのゴミだった。俺達はいわゆる孤児でね。このままでは妹、真子の生活もままならなくなってしまう。そんな悩みを抱えていると、このカードがデッキに入っていた、それだけさ。」

彼女から同情の色が見える。

「君みたいな才能の持ち主には、分からないさ。僕のターン！毘力ード、サンダーブレイク。手札を捨て、君のマッシブ・ウォリアーを破壊。バトル！ホープでセットへ攻撃！ホープ剣・スラッシュ。」

「シールドウイングの効果！戦闘で二度破壊されません！」

「へえ？厄介だな。僕は血の代償の効果、500払ってグリーンガジェットを召喚。効果でレッドガジェットを手札へ。そのままグリーンガジェットで攻撃！更に血の代償でレッドガジェット！効果でイエローガジェットを手札に！」

「く、くず鉄のかかし！」

「知っているよ。レッドガジェットでシールドウイングを攻撃！更にジェムナイト・パールで攻撃！」

「くう…！」

興野凧LP6000

緋色かなめLP5100

「伏せはブラフかい？カードを伏せてターンエンド。」

興野凧LP6000

手札2枚

「まだ、まだ諦めません！私のターン！私はチューナーモンスター、ジャンクシンクロンを召喚！効果でチューニングサポーターを蘇生！更に二重召喚発動！私はもう一度召喚が出来ます！スピードウォリアーを召喚！レベル1のチューニングサポーターと、レベル2のスピードウォリアーとレベル2のシールドウイングに、レベル3のジャンクシンクロンをチューニング！集いし星が、思い煌めく星となる！光さす道となれ！シンクロ召喚！スターダスト・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴンATK2500

「スターダスト・ドラゴンでレッドガジェットを攻撃！響いて、シンクロリング・ソニック！」

星屑の竜が、レッドガジェットを攻撃する。

「ホープの効果、発動！オーバーレイ・ユニットを一つ使い、モンスターへの攻撃を無効にする！ムーン・バリア！」

No.39 希望皇ホープORU2 1

「そんな！私は装備魔法、ファイティング・スピリッツを発動します！この効果でスターダストは相手モンスター一体につき300アップします！」

スターダスト・ドラゴン ATK 3700

「私は、ターンエンド！」「罨カード、砂塵の大嵐！くず鉄のかかしを破壊！」「ええ！」

緋色かなめ LP 5100

手札1枚

「俺のターン！僕は魔法カード、ライトニングボルテックスを発動。僕は手札を一枚捨てて、スターダストを破壊！」

興野凧

手札1枚

「スターダスト・ドラゴンの効果、リリースする事で破壊効果は無効にします！ヴィクティム・サンクチュアリ！」

「だが、ホープで攻撃！ホープ剣スラッシュ！」

「手札から、速攻のかかしの効果発動！手札から墓地に捨てて、バトルフェイズを終了します！」

「ちっ、俺はターンエンド。」「このエンドフェイズ、スターダスト・ドラゴンはフィールドに帰ってきます！」

興野凧 LP 6000

手札1枚

「もういい加減諦めなよ。君の手札はたった一枚。俺のライフは6000もある。何故諦めない？」

「私は、諦めません！光さす道は、偽りの希望になんか屈しない！私のターン！」

彼女が力強くドローする。何故、絶望しない？No.の力が機能しないから？いや

「…来た！私は罫カード、エンジェルリフトを発動します！墓地から、チューニングサポーターを特殊召喚！更に、チューナーモンスター、ターボシンクロンを召喚！レベル1のチューニングサポーターとレベル1のターボシンクロンをチューニング！集いし光が、新たな地平へと誘う！シンクロ召喚！光の架け橋、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロン！」

フォーミュラ・シンクロンDEF1500

「フォーミュラ・シンクロンとチューニングサポーターの効果で、二枚ドローします！」

緋色かなめ

手札2枚

「まだです！レベル8のスターダスト・ドラゴンとレベル2のフォーミュラ・シンクロンをチューニング！集いし思いが、新たな境地を呼び起こす！アクセルシンクロ！」

光の輪に包まれたスターダストが消える。

「消えた？」

「生来せよ！シューティング・スター・ドラゴン！」

シューティング・スター・ドラゴン ATK 3300

流れ星のような、美しい輝きを放つ竜が現れた。

side：真子

「多分、この辺だと思う！」

かなめの保護者、らしい女の人に言う。私が家でのんびりしていると、突然彼女から電話がかかって来た。兄貴がかなめを連れてどこかに行った。場所に心当たりはないかと。あたしは兄貴が一人で物思いにふける時よく行くという路地裏の広場が思い浮かんだ。

「あつ、いた！」

兄貴がかなめとデュエルをしている。

「ああ、遅かったか。」

女の人はずなだれる。何でも、自分が代わりに兄貴とデュエルをするつもりだったらいい。しかし、兄貴の様子がおかしいような…

「シューティング・スター・ドラゴンの効果！デッキの上から5枚カードを引いて、チューナーモンスターの数だけ攻撃する事が出来ます！」

「はっ！そんな運任せが通用するか！一枚も引けなかったら君の負けだ！」

兄貴…どうしちゃったんだよ…。

「私は…敗けられない！真子さんの為にも、あなたを救います！一枚目、ボルト・ヘッジホッグ！二枚目、奇跡の軌跡！三枚目、ジャンクシンクロン！四枚目、スターダスト・シャオロン！」

「だが、一度の攻撃ならホープで防げる！次に引いたカードがチューナーだとしても、ライフは残る！どうあがいても君には絶望の未来だけなんだよお！」

確かに、このままだと兄貴にターンが渡る。兄貴はプロだ。このチャンスを逃すと、次は無い。

「ドロー、チューナーモンスター、ゾンビキャリア！バトル、シューティング・スター・ドラゴンで、ホープに攻撃！！スターダスト・ミラーージュ！」

「聞いてなかったのか！ホープ、ムーン・バリア！」

NO.39 希望皇ホープORU10

「まだです！まだ絶望はしません！速攻魔法、ダブル・アップ・チャンス！攻撃を無効にされた場合、攻撃力を二倍し、もう一度バトルを行います！！！」

「な、何イツ！」

シューティング・スター・ドラゴンATK6600

「シューティング・スター・ドラゴンでレッドガジェットに攻撃！
！スターダスト・ミラージュ第一打！」

「ぐう！」

興野 凧LP800

「これで最後、ジェムナイト・パールに攻撃！！スターダスト・ミラージュ第二打！」

「ぐああああ！」

興野 凧LP0

デュエルが終了し、あたしは兄貴の所へ駆け出した。

side：かなめ

デュエルが終わり、私は座りこんでしまいました。

「まさか、プロに勝つなんて、すごいよ！」

奏太さんが駆けつけてきました。

「いえ、凧さんは所々ミスをしていました。あれがなければ…」

「それって…」

「No. に、抗ったのかも知れません。」

side: 凧

僕は、弱い。No. に負けただけでなく、妹の友人にてをかけるなんて…。

「兄貴、大丈夫!？」

真子が駆けつけてきた。

「真子…。僕は最低な兄だ。お前の友達に、手をかけようとした。」

「そんな事ありません。」

と、言ったのはさっきまで戦っていた少女、緋色かなめ。

「凧さんは、No. に抗ってミスをするよう仕向けていました。それは、心の底で欲望に抗ったからではないでしょうか?」

彼女は、暖かい言葉を紡いでいく。

「一度犯した間違いは、次に繋がばいいんです。これから、本当の希望を見失わないで下さい。」

そう言う彼女の笑顔は、一点の汚れもなかった。

side：銀次

まず、事件の顛末から。驚くことに、かなめが興野凧を倒したらしい。

かなめが使ったと言う、未知の召喚方法アクセルシンクロ。事件解決後デッキを調べたが、シューティング・スター・ドラゴンなるカードは存在しなかった。とすると、そのカードもNo.同様、特別という訳か…。

事件の張本人である興野凧だが、無事会心し、あのデュエルで何か感じる事があったのか、今ではプロの中でも中堅クラスの実力者だ。次に、ツヴァイと名乗る女。奴は奏太の情報網を用いても手掛かりすら掴めない。オシリス、四条家の計画を知っている等疑問は尽きないが、とりあえず…

「ええっ！？女じゃないの!？」

「僕は男だ!!」

「二人共、落ち着いて下さい!」

あの事件以来、よく遊びに来るようになった興野真子。かなめと仲良くなったとはいいが、奏太を女と間違え、ムキになった奏太と喧嘩している。

「ええい、このわからず屋め!」

「なにさ!!」

「お前等、静かに…」

注意しようとしたところを二人が振り上げようとした拳が俺の顎に
当たる。

「お前等…出ていけえ!!」

この事務所は当分静かになりそうにない。

第7話 光さす道（後書き）

今回は主人公の過去の

一場面、かなめの成長とフラグ を描写しました。
駆け足になってしまったので、補足。

風のデッキは、【代償ガジエ】。

この小説では珍しいガチです。

シューティング・スター・ドラゴンは、
当分出す予定はないです。

今回はこれからの伏線として出しました。

ツヴァイの行動は、次回書く予定です。

感想、指摘お願いします！

第8話 とあるバカの憂鬱（前書き）

日常回。ここから少しの間デュエル無しの予定です。

第8話 とあるバカの憂鬱

とある場所

「成る程、四条銀次は神を倒した、と。」

どこか冷徹さを感じる声に、ツヴァイは続ける。

「はい。しかし、そこまででした。その時点で奴は万策尽き、私の勝ち同然でした。」

「そうか、ご苦労。暫く休むと良い。」

「では、そうさせて…「アインス、腹減った。」トライ、今は会議中だぞ！」

喧嘩する二人。アインスと呼ばれた白髪の青年は
「二人共落ち着け。」

と、トライという、ボサボサの髪少年とツヴァイという、長髪の女性を諷める。

「とりあえず当面の目的は、N.O.を利用し、負のエネルギーを増幅していくことだ。トライ、お前はとりあえずN.O.持ちの決闘者を見つけ次第デュエルを行ってくれ。」

「ヘッ？N.O.持ちかラ奪い取るんですか？」

「いや、ツヴァイの報告では、デュエル中に負の感情が色濃くでた

ケースがあつたらしい。勝つてもN.O.を奪う必要は無い。ただ、絶望に叩き落として欲しい。」

「了オー解。要は、いたぶればイインだね？」

少年、トライは赤く濁った目を嬉しそうに細め、外へ出ていった。

side：奏太

長期休暇が終わり、かなめちゃんが中等部に入学し、僕は高等部二年生となった。

「うつす、奏太。」

陽気に声をかけてきたのは、我が悪友、氷室ひむろ 夕ゆうだ。

「おう、おはよう。休み明けて、なんなのかねえ？」

「知らん。ところで、お前宿題やったのか？」

「ふあさあか！」

「だろうな。」

「相変わらず、夕は無表情だねえ。」

彼は日頃無表情でなに考えてんのか分からないけど、整った顔つきかつ運動神経抜群で中々女性人気が高い。唯一僕を男だと知って驚かなかった事也有名だ。

「いや、これでも結構驚いたけど。」

「マジで！！ってか、心読んだ！？」

なんて談笑していると、

「奏太ー！！俺だ、結婚してくれー！！」

と、女子が突っ走ってきた。

「うわあああ！間に合ってます！」

彼女の名前は東雲 葵^{しのめ あおい}

何の儀式なのか、毎回僕に向かって突っ込んでくる。

「毎回思っただけど、なんの儀式？これ。」

「愛の儀式…かな？」

「まるで意味が分からんぞ！」

ちなみに、こんなんだけど成績はトップクラス。 つくづく世の中
って理不尽だと思う。

「あ、皆おはよー。」

「良かった。君だけが普通の常識人だ！」

「普通って言うな！！」

今の僕の心を癒す彼女は 十人 とにん 成実 なみ とことん普通の子生徒だ。
常識人の僕にとって、正にオアシス…！

「なに考えてんのか知らんが、お前も充分変人だからな。」

「夕君、何を失礼な。僕は至って普通の男子高校生さ！」

「そこに書いてあるのは？」

ハッ！何故僕は人とバイクがドッキングしている絵を…！？

「ひどい！こんなものより私を見て！」

「待つて！僕の究極最終進化形態を消さないで！！折角上手く書けたのに！！」

「やっぱり、十人が一番普通だな。」

「普通って言うな！！」

……この時、僕は久しぶりにツツコミ不在の恐怖を味わった…！

side：かなめ

入学試験も合格し、いよいよ入学式です！緊張するなあ…。

「オッス、かなめ！！」

「あっ！真子さん、おはようございますー！」

あの事件の後、真子さんもデュエルアカデミアに入学する事が分かりました。真子さんは最後まで秘密にしたかったと、照れながら言っていました。暫く二人で話していると、

『新入生は、入学式が始まりますので、体育館へ行って下さい。』

と、放送があつたので、二人で体育館に急ぎました。何気ないけど、幸せだなあ…。

side：奏太

未だかつて、こんなカオスな事があつたらうか…

「また…四人同じクラス…だと…！」

「わー、本当だあ！」

「奏太とまた同じ…ふふふ…」

「こんな事もあるんだな。」

上から僕、成実、葵、夕だ。

「こんなの絶対おかしいよ！」

「おかしくないわ。必然よ！」

葵が何故か熱く熱弁する。

「なんでさ！」

「私とあなたの…運命だからよ！」

駄目だコイツ…早くなんとかしないと…！

「それより、はやく教室に行かない？新しい教室ってワクワクする
！」

「…普通だねえ」

「だから、普通って言うなー！！」

いや、普通こそ君の美点の一つなんだよ…。なんか、すごい癒される。

だが、この癒しも、一瞬にして崩されることとなる。

「俺は担任の古田康夫だ！宜しくな！！」

……まさかの熱血系生徒指導、古田教諭が担任であった。
なん…だと…！

「おい、雑賀じゃないか！宜しくな！！」

と、教諭は僕の背中をバシバシ叩く。

「…ドンマイ」

三人が僕にそう告げる。嗚呼、憂鬱だ…。

……

「じゃ、さよなら」

「おう、また明日。」

僕と夕は別帰路なので別れる。成実は部活、葵は委員会らしい。

クラスの皆、僕が男だつて事に驚いてたなあ。

ま、去年もだつたけど。しかし、古田教諭か…。悪い人じゃないけど、なんというか、やたら僕に目をかけてくるんだよね

あの補習の恨みは忘れん…

なんて冗談半分で考えていると、僕と同じくらいの年の、赤い目の男の子が何か困っていた。

「どうかしました？」

「いやア、この飲み物が飲みたいんですけど…」

と、自販機を指さす。

変わったイントネーションだなあ。外国生まれとかかな？

「ああ、これなら、ここにお金を入れて…」

自販機からジュースを買い、男の子に渡す。

「すんません！」

「いいよ。君、外国の人？日本語上手いなあ。」

「アー、そうッス。ちよつと上司にお使いたノまれて…。二人共変ワリ者でネ。」

「分かる、分かるよ！君の苦勞！僕は普通の学生だけど、立場が上の人間に対する苦勞！」

「分かってくれるッスか！心の友よー！」

「うおー！」

何故か意気投合した、外国人の男の子。それから僕たちは愚痴を言い合った。

「いやあ、気が合うね。僕は雑賀奏太。君は？」

「トライッス。ん？雑賀って…。」

「なんだい？」

「いや、忘れたッス。」

「なんだそりゃー！」

それから、僕たちはまた夜遅くまで語り合った。

第8話 とあるバカの憂鬱（後書き）

今回は、主に奏太の
日常です。

次回は、今回出番のなかった主人公、銀次の日常メインで進めて行
こうと思います。

感想、評価待ってます!!

第9話 探偵の決意（前書き）

予告通り、今回は主人公、銀次の日常回です。

前回と違って、シリアス（笑）となっています。

第9話 探偵の決意

side：銀次

「四条家の詳細について教える？」

奏太達を見送り、俺は警察の所に行った。四条に何があつたのかわかるために。

「いや、先輩には世話になりましたけど、これは極秘事項だからなあ。」

こいつは伊勢 哲也（いせ てつや）。俺と同じ仁朗さんに拾われた奴で、警察をやっている。俺が探偵業をする上で、警察との連携を取れるのはこいつのおかげだ。

「……オシリスの天空竜を使う者を見た、と言ったら？」

オシリスの天空竜

オベリスクの巨神兵

ラーの翼神竜

この三幻神を使いこなす事が四条家の最終目的だったのは、俺が一番知っている。ならばその目的が行き着く先は何か？それを知れば、ツヴァイの手掛かりが掴めるかも知れない。

「！？…本当ですか！？」

やはり、神の名に反応した。こいつは何か知っている。

「ああ、しかも俺は実際に戦った。負けたがな。」

…状況的にも、精神的にも。

「…よく無事でしたね。しかし、いくら先輩と言えど、民間人に首を突っ込ませる訳には…。」

「俺は、名字の通り元々四条の人間だ。モルモットで、捨てられたがな。」

俺はN.O.のカードを手に取り、灰色となった片目を見せる。

「先輩…目が…！」

「あいつらの実験のおかげで、多少の異常には耐性が出来ている。このN.O.も異常の一つだ。あの成金も、こいつに取り憑かれていた。」

「…信じますよ。着いてきて下さい。」

哲也は、俺を資料室まで案内してくれた。

「…結論から言うと、四条家は滅んでいます。」

「滅んだ？」

「俺も、あの時は偶々近所のパトロールをしていただけで、事件を担当していた上司に聞いた話ですが…連中は神の力を束ねて、創造神を召喚するつもりだったそうです。」

「創造神？N.O.なんて異常なもの持つてる俺が言うことじゃあな

いが、話が胡散臭くないか？」

「先輩は、知りませんか？神の怒りに触れた人間の末路を。あの事件から、警察も神の存在を信じるようになりました。」

確か、もう何十年も前、ある犯罪グループが神の複製をつくり、精神の異常、最悪死亡したと言う話だったか…。

「三幻神の内一体だけでもあそこまでの影響が生まれました。そんなのが三体集まれば…」

そこで、一息おき、

「…世界が、滅ぶでしょう。」

「ま、待て！神の怒りとやらはおそらく事実だ。俺も奴らの実験で経験済みだしな。だが、神を持っていた奴はまがい物と呼んでいた！四条家の神も奴等が複製したコピーじゃあないのか！？」

「確かに、オリジナルの神は、初代決闘王者が墓守の一族の元に封印したと伝えられています。今現在も彼らによって守護されているでしょう。」

「ならば、あいつ達も神の怒りを買っているはずだ！何故俺の見た奴は平気だった？」

「俺は見えてないんでなんとも言えませんが…もし、そいつらがコピーの神を操る術を知っていて、コピーから『なにか』を創るつもりだとすれば？実際、過去に神を縛るカードを用いて無理矢理操った例もあります。先輩が言う奴等は、四条家から神のカードを奪い取り、四条家の計画を継いでいる可能性があります。」

不意に、寒気に襲われた。オシリス一体にさえ、俺は敵わなかった。もし、哲也の言う通りだとすれば俺は、あいつ達等を守れるだろうか？

「…成る程、四条の計画、神のカードについて、かなりの情報が掴めた。ありがとう。」

「いえ、先輩の頼みですから。お礼ってんなら、今度飯でも奢って下さい。」

俺にそう笑いかける哲也の顔は、どこか心配そうだった。

「…おう。期待して待つてろ。上手い飯を喰わせてやる。」

今は、こんな事しか言えない。

side：アインス

四条銀次。

四条家の創造神計画。

その過程で、神に対する一時的な耐性を見せるものの、完全な耐性を身につけた検体が既にいたため、不完全とされ廃棄される。

四条家から盗んだ資料だ。No.を操ることのできる人間が一人でも欲しい。そう考えてツヴァイを送り込んだ。結果は神を打ち倒す上々だった。

「失礼します。」

ノックの音と共に、

ツヴァイが入ってきた。

「どうした？」

「いえ、何故あの失敗作を気にしているのか、疑問に思いまして…」

「彼は失敗作じゃない。我々の計画に必要な人間だ。神を操る力は必要ない、N o . を操れることが重要なんだ。」

「…成る程。失礼しました。」

ツヴァイが去っていく。

そう。彼は必要だ。いずれ神とN o . を束ね、世界を幸福に導くために…。

side：銀次

哲也と別れ、事務所に戻り昼飯を作っていると、チャイムが鳴った。

「おい、銀次いるか？依頼があるんだけどよ。」

扉を開くと、アクセサリーをジャラジャラさせた 柄の悪い男が現れた。

「お前とはなるべく会いたくなかったよ。」

「うオいつ！ボソツと悪口言っつて扉を閉めるな！！」

「はあ、なんのようだ？由樹。」

「さっき依頼つつたろ！？」

こいつは比奈^{ひな} 由樹^{ゆき}。俺が仕事を始めた頃の探偵仲間だが、とにかく厄介事を持ち込んでくる。ある日は裏取引の調査、ある日は政治家の浮気調査。あぐくのはてにはN.O.に取り憑かれた。

「依頼も何も…一応俺ら同業者だよな？毎回思っけど…」

「探偵は助け合いだろ？」

「あれ？助けてもらった覚えがない。」

「…………と、とりあえず依頼だ！」

誤魔化しやがった…と奴を睨んでいると、一枚の紙をつきだした。

「…………政治家のスキャンダル？」

「ああ、こいつは黒い噂が絶たなくてな。不正な取引が無いか確かめて欲しい。」

「こいつは、確か…」

奏太のパソコンを弄る。

「ほれ。こいつの身辺情報。」

「おお！！済まねえ！だが、これで、お前は用無しだああ「オラアッ！」ぐえっ！」

由樹が俺に殴りかかる。何時もの事だ。こいつは情報をタダで貰おうと、俺を暴力で脅そうとする。

「…お前の強さ、反則くせえよ。」

「はぁ…。いい加減止めろ。この茶番。」

「次は…次は、覚えてろよおお！」

と、情報料と依頼の七割を置いて走り去っていく由樹。多分最低な卑怯者なんだろうが、変な所で律儀な奴なので、俺は嫌いじゃない。…強さ、反則くせえよ、か。

俺は、強くない。ただ四条の実験の過程で力が身についたただけだ。

かなめのような才能も

奏太のような知識も

譲二のような強運も

哲也のような勤勉さも

由樹のような根性も

あるのは、たまたま身についた力と、異常に対する耐性くらいなもの。

だから、だからこそ

俺が、皆を脅威から守らないといけない。

第9話 探偵の決意（後書き）

今回の話の補足を少し。

神の怒り云々は

グールズの事件です。

初代決闘王者Ⅱ遊戯です。多分、神のカードは墓守の一族が守護している。みたいな感じで広まるんじゃないかなあと思いました。

独自設定です。

神を操るカードは、

G Xのペガサスの部下の…誰だったかが使っていました。

感想、評価待ってます。

第10話 少女交流中（前書き）

遅くなりました。

すいません…

次回からデュエル描写をしています。

第10話 少女交流中

side:かなめ

入学式が終わり、学校生活の簡単な説明が終わりました。

「よし、今からクラス歓迎会やろー!」

真子さんは、社交的な性格ではやくもクラスのリーダー的存在となりつつあります。

「っっいえーい!!」

男女共に、ほとんどの人が賛成しています。

「じゃ、放課後学校前集合で!!」

リーダーシップだけでなく、活発そうな髪形と、きれいな茶色い目、皆を惹き付ける見た目に少し羨ましく感じます。

.....

授業が終わり、放課後。私達はファミレスで歓迎会をしています。

「緋色さん。私達と一緒に食べよ!」

真子さんと数人の女の子達。

「あ、はい!」

緊張して、つい声に力が入ってしまいました。

「緋色さん、これからよろしく！」

「あ…はい！よろしく願います！」

「敬語じゃなくていいよ。」

「あ、分かりました。」

「まだ敬語じゃん！」

笑う皆さん。ああ、私としたことが…

「うわっ、ジュースこぼしちゃった！服が…！」
ジュースをこぼして、嘆く真子さん。

「真子さん、ちょっとこちらに。…うん。このくらいのシミだった
ら、こうして…はい、後は家で洗えば落ちますよ。」

「かなめすごっ！！シミ抜きできるんだ！？」

いきなり私を誉める真子さん。

「やり方さえ覚えれば、簡単ですよ。」

「緋色さん、すごいー！！」

「ふふん、かなめは私の自慢の親友だからな！！」

「真子が威張る事！？緋色さん、わたしにも教えてー！！」

「まず、ここを…」

side：真子

最初はなかなか打ち解けなくて少し寂しかったけど、かなめももうすっかりクラスに打ち解けてるな！！

かなめにはあたしには無い魅力がたくさんある。すごい器用で、何でもそつなくこなすし、おしとやかで、とても可愛い。それだけじゃなく

『一度犯した間違いは、次に繋がればいいんです。これからは、本当の希望を見失わないで下さい。』

兄貴を…あたしを救ってくれた。

だから、あたしはかなめがちよっぴり羨ましい。

「真子ー！ポテト来たよー！」

「おっ！あたしも食べるー！」

今は、打ち上げを思いっきり楽しむぞー！！

side：ツヴァイ

どうしても、納得いかない。あの男…四条銀次が不可欠な存在？冗談じゃない。私なら、一人であいつ数人分の働きはできる。なのに…

「うーッス。」

「トライか。No. 使いは順調に見つかっているのか？」

「今日で五人。とりあえず、たつき潰した。」

こいつは、馬鹿だが有能な奴だ。

「トライ、四条銀次についてどう思う？」

「ん？結構面白いと思う。あんたの神ヲ倒す奴なんてアインス以来だろ？」

そう言えば、我が神を倒した人間は、彼以外では四条銀次しかない。

「後、どことなくアインスと似てる気がするんだよねえ。」

確かに、何となく似ている。まさか、彼は…。

面白い。四条銀次がただの失敗作でない可能性が出てきた。おそらくそこにアインスが奴を拘る理由がある。

「トライ、お前の仕事、手伝ってやる。」

「マジで！？助かるッス！！」

探偵を名乗る奴なら、何人かの決闘者が通り魔に会うのを怪しむはず。

私達がNo・使いを襲っていけば、奴が首を突っ込んで来るだろう。

待っている、四条銀次…

side：かなめ

「ううゝ、もう腹一杯…」

歓迎会が終わり、もうすっかり夕方になってしまいました。私は、お腹一杯の真子さんを連れて家に帰っている途中です。

「中等部：かあ。かなめさ、どうだった？」

「はい。皆と楽しく過ごせそう：だよ。」

「あれ？敬語直ったの？」

養父との生活で敬語が身について、まだまだ馴れないけど、普通に話せるようになったいです。

「皆と、普通に話せるようになりたいです：から。」

「ふふ、直ってないじゃん！じゃ、あたしも呼び捨てでよんでよ！」

「ま：真子」

「まだ固いなあ。」

笑顔で話す真子さん、嫌真子ちゃん。

まだまだ道は険しいです。

第10話 少女交流中（後書き）

どうだったでしょうか？

女の子トークってこんな感じかな…？

今回はほのぼのを目指して描いてみました。

感想、評価お待ちしております。

登場人物紹介 2（前書き）

今回は、今後登場する予定の人物を紹介です。

登場人物紹介 2

設楽 譲二（しだら じょうじ）

性別 男

年齢 21

銀次の高校からの友人。家業を継いで八百屋を営んでいる。

見た目は極の道の人かと間違えるくらい強面。人当たりが良く、子供好きで穏やかな性格で近所の評判も良い。

デュエルは余りしないがとてつもない強運の持ち主で、だいたいのデッキを使いこなせる。

使用デッキは、気分によって変えている。

興野 真子（きょうの まこ）

性別 女

年齢 12

かなめが困っている所を助けて以来の、かなめの親友。

活発的な見た目で、ショートヘア、綺麗な茶色い瞳をしている。

性格も活発で、誰とでも仲良くできるリーダー体質。しかし、兄の心配をするなど、繊細な一面も。

使用デッキ【サイバー】

氷室 タ（ひむろ ゆう）

性別 男

年齢 16

奏太の悪友その1。

何事にも無表情で、落ち着いた判断をする。

奏太が男と分かり、学校で唯一驚かなかった男として有名（本人曰く、かなり驚いたらしい。）

スポーツ万能で、無表情ながら整った顔立ちをしているので女子人気が高い。成績は中の上くらい。

使用デッキ【戦士族シンクロ】

東雲 葵（しのめ あおい）

性別 女

年齢 16

奏太の悪友その2

成績トップクラスで、男子人気も高いが、奏太に猛烈な愛情をぶつけてくる変人。しかし奏太にはいまいち伝わってないらしく、何かの儀式か呪いかと思われる。

普段は普通に優等生で、教師からの信頼も厚い。

使用デッキ【ユベル】

十人 成実（とにん なみ）性別 女

年齢 17

奏太の悪友その3

良くも悪くも普通の少女。普通と言われるのを嫌う。女の子らしく、可愛い物好き。

奏太達の間では、癒されると、よくいじられる。進学と同時に年齢が上がり、皆より年上なのが密かな自慢。

使用デッキ【もけもけ】

比奈 由樹（ひな ゆき）

性別 男

年齢 26

銀次の元探偵仲間。現在では、逆に銀次を頼って情報屋紛いの事をしている。

悪党を気取っているが、要領が悪く、いつも銀次に返り討ちに合う。銀次曰く、「厄介事を持つてくる男」

一応、喧嘩の腕は中々。

使用デッキ【追い剥ぎハンデス】

伊勢 哲也（いせ てつや）性別 男

年齢 20

雑賀仁朗に引き取られた孤児の一人で、銀次、奏太と面識がある。現在は警察官を勤めており、銀次達と警察を中継している。

ドがつくほどの真面目で上司から重宝されている。銀次のことを先輩と慕っている。

デュエルは、余り経験が無く、初心者同然。

興野 凧（きょうの なぎ）性別 男

年齢 19

興野真子の兄で、プロデュエリスト。期待の若手だったが、負け越しが続き、孤児で頼りの無い事で焦り、N.O.に取り憑かれる。現在は、かなめによって救われ、中堅クラスの実力者として復活した。

元々優しい性格で、人を思いやる力が強かった為、N.O.に完全には憑依されなかった。

使用デッキ【代償ガジェ】

登場人物紹介 2（後書き）

トライ、ツヴァイ、アインスは、話がもう少し進んでから紹介を書こうと思っています。

感想、評価お待ちしておりますー！

第11話 何度ぶっ倒しても（前書き）

今回、ネタ満載で

奏太が意味不明となっていました。

デュエル回です。

第11話 何度ぶっ倒しても

side: 銀次

「ふうん、通り魔ね。」

新年度から数日、奏太達が学校に行っている間に老人から依頼が来た。

「はい。このところ、デツキを持っている人間が続けて数人襲われる事件がおきてます。警察も調査しているようですが、探偵の力を借りたいと…。」

「わかりました。ところで、被害者に何か共通点は？」

コーヒーを啜りながら聞く。かなめほど上手く淹れれないな。

「被害者は共通して、No.がどうのこうのと…。」
ぶっ！

「ごほつごほつ！No.ですか。分かりました。任せてください。」

「助かりました。あ、私は被害者の会を代表して来た飯塚と申します。」
「そうして、飯塚という老人は帰って行った。」

「No.使いを狙う通り魔？あいつらか…？」

ツヴァイの顔が思い浮かぶ。

「…奏太達が危ない。」

N o . の事を知っているのは、俺達を含め奴等ぐらいなもの。そして…

「ホープ回収し忘れた…。」

N o . を所持しているのは、仁朗さんから直接N o . を譲り受けた奏太。

後、皿を倒してN o . をてにいれたかなめ。

俺だけじゃ足りない。そう思い、俺は電話を掛けた。

side : 奏太

… ややややばいって。

「私とデュエルをしろ。さもなくば…」

と、黒いスーツの大男が素手で壁に穴を開ける。学校帰り、皆と別れてちよつと寄り道したただけなのに！！

「… やなこつたい！！」

逃げるが勝ち。不意をつき僕は反対側へ走った。

「させん！」

はやっ！？もうすぐ後ろのあたりなんですが！？

「ていつ！」

とりあえず、鞆で頭を打つ。少し強すぎたかな？

「ぬうう、クソガキがあ！…殺す（ボソッ）」

今殺すって言ったよ！？

デュエルは！？

てか、哲也兄ィ仕事しろ！

なんて内心でツツコンでいると、行き止まりだった。

「さあ…もう逃げられまい。」

いや、マジでヤバい。このままじゃ…

「無駄あつ！」

突然、おっさんが倒れた。何事？DIO様？

「奏太、大丈夫か？」

そこにいるのは、いつも通り無表情な我が悪友の夕だった。

「無駄無駄無駄あつ！」

……あれ？殴つてんの葵？人間技じゃねえ！

「葵が急に奏太が危ないとか言つて、こっちに走って行っただよ。お前、盗聴器でもついてんじゃないね？」

思わず体を探ってしまった。成実は隅っこで警察呼んでる。うん、普通普通。

「このっ！」

「「「^{ちゃん}葵！」「」」

DIOさ…葵が倒れる。僕達は急いで駆けつける。

「屑の分際で…！俺はてめえらゴミに構ってる暇なんてねえんだよ
！！そんなにこの小娘が大事かあ！！」

ブツン。何かがキレた気がする。

「おい。」

「あん？」

「デュエルしろよ。」

黙って聞いてりや人を屑だのゴミだの…お前なんかより、葵の方が
よほど価値があるっての。そして…僕は男だ！！

「そうだ。最初からそう言えば「うん。分かった。早くしよう。」
ちっ…」

男の声が耳障りだ。早く潰そう。

「「デュエル！！」「」

雑賀奏太LP8000

手札5枚

男A LP8000

手札5枚

「先行は俺、ドロー！！俺はフィールド魔法、ダークゾーン発動！カードを伏せ、ハウンド・ドラゴン召喚！」

ハウンド・ドラゴン ATK1700 2200

「お前のデッキはトークンだと聞いた。ならば、強化の暇を与えずに序盤から攻撃力の高いモンスターを召喚すれば問題ない！！更に禁止令！スライム増殖炉を指定！」

「……………」

「そして、愚かな埋葬！デッキから、ゾンビキャリアを墓地へ！ターンエンド！！」

男A LP8000

手札2枚

「…僕のターン。僕は、手札から愚かな埋葬を発動。デッキからユベルを墓地へ。」

「トークンじゃないだとお！！」

「あんたはいきなりデュエルを挑んできた。対策してるだろうことなんて、簡単にわかる。さっき葵から拝借したんだ。さらに、モンスターをセット。カードを四枚セットし、ターンエンド。」

雑賀奏太 LP8000

手札0

「く…俺のターン！俺はもう一枚ハウンド・ドラゴンを召喚！」

ハウンド・ドラゴン ATK 2200

「更に、ゾンビキャリアの効果！手札一枚をデッキトップに戻し、特殊召喚！」

ゾンビキャリア ATK 400 900

「だったら、畏カード、バトルマニア。あんたはこのターン攻撃を強制される。更にチェイン、エネミーコントローラー。セットモンスター、クリッターをリリース。ゾンビキャリアのコントロールを得る。そしてクリッターの効果、デッキからキラートマトを手札に」

「はんっ！シンクロさせねえつもりか？構わねえ！ハウンド・ドラゴンでゾンビキャリアを攻撃！」

「畏発動。リミット・リバーズ。墓地からユベルを特殊召喚！」

ユベル ATK 0 500

「タイミングを間違えたな！ハウンド・ドラゴン、攻撃対象をユベルに変更！」

男 A LP 5800

「なに！？なぜ俺のライフが…！」

「ユベルの効果、ナイトメア・ペイン…。ユベルは戦闘では破壊されず、ダメージも受けない。更に、相手は攻撃したモンスターの攻

撃力分のダメージを受ける。」

「何！その為にバトルマニアを……！ならば、二体目のハウンド・ドラゴン、ゾンビキャリアを攻撃！」

「畏発動、シフトチェンジ。攻撃対象を、ユベルへ。ユベル、ナイトメア・ペイン！」

「ぐううう！」

男A LP3600

「クソが……！俺は二体のハウンド・ドラゴンをオーバーレイ！破滅の化身よ、今こそその忌まわしき力を発揮しろ！エクシーズ召喚！No.30破滅のアシッドゴーレム！」

破滅の象徴、とでも言うべきゴーレムが、体から酸を撒き散らしながら出てきた。

「No……？」

「そうだ……！このカードで俺は世界を破滅させてやる……！ふはははは！俺はターンエンド！そしてえ！ゾンビキャリアは俺の元へ……！」

男A LP3600

手札1枚

「No……か。僕のターン。僕は、ユベルを守備へ変更。リミットリバースの効果でユベルを破壊。」

「馬鹿め！自分からユベルを破壊しやがった……！」

「ユベル - Das Abscheulich Ritter。」

ユベル - Das Abscheulich Ritter ATK 0
500

双頭の竜を従える、異形の悪魔が現れた。

「何！？どういう事だ！」

「ユベルは痛みを糧に進化するモンスターだ。破壊されると、手札・デッキ・墓地から特殊召喚される。僕はターンエンド。このエンドフェイズ、ユベル - Das Abscheulich Ritterの効果発動！このモンスター以外のフィールド上の全てのモンスターを破壊する！フェロー・サクリファイス！！」

雑賀奏太 LP 8000

手札1枚

「ば…化け物め…！俺のターン！俺は、カードをセット、ターン…エンド。」

？を倒されてショックみたいだ。だが、僕の怒りは収まらない！

「僕のターン！」「罨カード、サンダーブレイク！手札を一枚捨て、その化け物を破壊する！！これで仕切り直しだ！」ユベルの効果は発動しない。」

「はっ！最後の最後でミスしやがった！」

「…おまえの手口は素晴らしかった！戦術も！リアルファイトも！だが！しかし！まるで全然！！この僕を倒すには程遠いんだよね！！！」

「でたよ、奏太の悪い癖。シリアスかと思っただらこれだよ。」

夕が何か言ってるけど、気にしない！

「ユベル・Das Abscheulich Ritterが破壊されたことにより、愛さえいらなくなった絶望、機皇帝グランエルを手札から特殊召喚！グランエルは、自分のライフの半分の攻守を得る！」

機皇帝グランエル ATK4000

「あ…あ…」

「希望を与えられ、それを奪われる。まさにDEATH GAME！！機皇帝グランエルで攻撃！！グランドスローター・キャノン！！！」

「あ、あああああ！！！」

男A LPO

「何度ぶっ倒しても、ぶっ倒しても！俺の怒りは収まらない！」

「う、うわあああ！！！」

男が逃げていく。久々に頭にきたな。ま、最後のセリフはネタだけ。葵は大丈夫かな？

「葵、大丈夫かい!？」

「ええ、貴方の愛が…」

「うん、大丈夫そうだね!」

デッキと言い、性格といい…どこのヤンデレだよ。

「とにかく、皆ありがと。とりあえず、僕は銀さんとこに行ってくるよ。」

「そうだな。ところで、助けてやった俺らに対して、何か無いのか？」

「私なんて、怪我したのよ?」

「私と夕君見てただけだけどね…。」

忘れてた。皆が素直じゃないことを…成実さん、君はなんて謙虚なんだ!!普通にいい人だよ!!

「今、普通って思ったでしょ?私もなんか奢ってもらっから!」

しまったあ!?!?てか、心読んだ!?

銀さんのことから、既に手はうつてるだろうけど、かなめちゃんが心配だなあ。とりあえず、銀さんに報告だ!

僕は、三人を連れて事務所へ帰った。

第11話 何度ぶっ倒しても（後書き）

男のデッキはトークンメタのローレベルビートです。

葵のデッキはユベル中心に機皇帝が愛を失ったうんぬんで、愛繋が
りとして入ってます。

感想、評価お待ちしております。

第12話 暴動、街にて。（前書き）

今回、アインスの正体に迫ります。
分かる人は分かるかもしれません。

真子の初デュエル回でもあります。

第12話 暴動、街にて。

side:かなめ

「私とデュエルしなさい!」

放課後、アカデミアを出ると、いきなり女の子がやって来て言いました。

「へ?私?」

「そうよ!あんたから私と同じカードをてにいれないと...」

「む?何か訳ありっぽいな!あたしとデュエルしない?」

真子さ...ええと、真子ちゃんが話に入る。

「なんであんたと!?」

「デュエルすれば、相手がわかる。アカデミアでは伝説になった人の言葉だ!さあ、あたしとデュエル!」

「むう、分かったわ。」

「デュエル!」

興野真子LP8000

手札5枚

女の子LP8000

手札5枚

「私のターン！私は、永続魔法、凡骨の意地を発動！そして、ジェネスティックワーウルフを召喚！」

ジェネスティックワーウルフ ATK2000

「私はこれで、ターンエンド！」

女の子 LP8000

手札4枚

「よっし、あたしのターン！」

確か、真子ちゃんのデッキって…。

「あたしは、サイバー・ラーヴァを召喚！」

サイバー・ラーヴァ ATK400

……サイバーデッキ。昔は一つの流派として有名だったけど、今は廃れてしまったんだっけ。ハイリスクだけど強大なパワー。豪快な真子ちゃんらしいと思います。

「カードを伏せてターンエンド！」

興野真子 LP8000

手札4枚

「サイバー流？今は余り聞かないから、消滅してるのかと思った。」
「まだサイバー流は消えちゃいない！！リスペクトデュエルで、あたしはこのデッキと強くなるんだ！」

「ふーん、私のターン。凡骨の意地の効果、ドローしたカードが通常モンスターの場合、更にドローできる！今引いたのはブラッドヴォルス。ドロー、セイバーザウルス。ドロー、ラビードラゴン。ドロー…これで打ち止めか。」

女の子 LP8000

手札8枚

「そして、ブラッドヴォルスを召喚。」

ブラッドヴォルス ATK1900

「バトル。ブラッドヴォルスで攻撃！」

「サイバー・ラーヴァの効果、あたしはダメージを受けず、デッキからサイバー・ラーヴァを特殊召喚！」

「だったら、ワーウルフで攻撃！」

「効果でもう一体のラーヴァ！」

「…バトルフェイズを終了。魔法カード、二重召喚。二体をリリース、ラビードラゴンを召喚！」

ラビードラゴン ATK2950

「カードを伏せて、ターンエンド。」

女の子 LP8000

手札5枚

「中々やるな！あたしのターン！あたしは、サイバードラゴンツヴァイを召喚！」

サイバードラゴンツヴァイ ATK 1500

「サイバードラゴンツヴァイの効果、手札の融合を見せることで、このカードをサイバードラゴンと扱う！魔法カード、融合！手札のサイバードラゴンとサイバードラゴンツヴァイを融合！サイバー・ツイン・ドラゴンを融合召喚！」

サイバー・ツイン・ドラゴン ATK 2800

興野真子

手札2枚

真子ちゃんの場合に双頭の機械竜。しかし…

「そいつじゃ、ラビードラゴンに勝てないよ。」

「慌てない慌てない。バトル！伏せてた速攻魔法リミッター解除！あたしの場の機械族の攻撃力を二倍にするよ！！」

サイバー・ツイン・ドラゴン ATK 5600

「ラビードラゴンに攻撃！エターナル・ツイン・バースト！」

「くっ…！」

女の子 LP 5350

「サイバー・ツイン・ドラゴンは2回攻撃ができる！いつけえー！」

「い、嫌だ！速攻魔法、収縮！！…っうわああ！」
サイバー・ツイン・ドラゴン ATK 2800

女の子 LP 2550

「んー。じゃ、カードを二枚伏せてターンエンド！リミッター解除の効果で、あたしの場の機械族を全て破壊する。」

興野真子 LP 7000

手札 0枚

…女の子の感じが、おかしい？

「わ、私のターン…凡骨の意地の効果、今のは千年原人、ドロ…通常モンスターじゃない。」

女の子

手札 7枚

「カードを二枚伏せて、手札抹殺…お互い手札を全て捨てて、その枚数分ドロ！」

「あたしに手札はないよ！」

女の子

手札 5枚

「勝たないと、勝たないと…っ私は！」

「何かあつたの？誰かに脅されたとか？」

真子ちゃんの様子が、一変して真剣な顔つきになります。

「うるさいっ！私は、伏せていた二枚の思い出のブランコを発動！墓地から二体の千年原人を特殊召喚！」

千年原人ATK2750

「二体の千年原人で攻撃！」

「カウンター罠、攻撃の無力化！」

「くっ、二体千年原人をオーバーレイ！幻惑の眼を持つ支配者よ、敵を惑わせ！エクシーズ召喚！No.11ビッグアイ！」

No.11ビッグアイATK2600

巨大な目の、幻惑の魔術師が現れました。

side：銀次

奏太、かなめのデュエルから遡る。

俺は奏太達を探す手伝いを頼むため、譲二に電話を掛けようとした。その時、

「余計な人間を巻き込むな。俺達はNo.所持者のみを標的にしている。」

どこからともなく、仮面を被った男が現れた。どこか、全体的に褪せた印象をつける。

「お前は？」

「そうだな、アインスとでも呼んでくれ。ツヴァイの仲間だ。」

「……！お前、まさか一連のN.O.所持者襲撃事件、お前達の仕業か！？」

「……………ああ。」

「ならば何故そんな事をする！N.O.を奪わないのか！？」

「奪つても、使える人間が少ないからな。必要な分だけ所持している。」「……余計に分からない。何故襲撃する？」

「N.O.所持者の負の感情から抽出されるエネルギー、それを集め、世界を『幸福』に導くためだ。」

「どういつ……ことだ……？神と関係しているのか？」

「まだ知らなくても良い。じゃあな。」

「っ、待て……！」

俺の手が、アインスの仮面に当たり、奴の素顔が明らかになった。

「！？」

呆気を取られているうちに、アインスは消えた。奴の顔は

「俺？」

白髪で、全体的に褪せたような印象だが、まるで鏡合わせのように……俺にそっくりだった。

side：真子

No…。兄貴と同じ…！

「あなた、No…を…！？」

「そうよ！No…を手に入れて皆が私を認めてくれるようになった…！なのに…あいつらが他のNo…を狩らないと、私のNo…を奪うって…！」

女の子の目から涙が流れ落ちる。

あいつらって、銀次さん達が言ってたツヴァイって奴ら…？

「私は、カードを二枚伏せてターンエンド！さあ救うってんなら、私に負けて、No…を出してよ…！」

女の子 LP2550
手札3枚

この子、兄貴と同じように、No…に汚染されて、依存している！

「No…で皆が認めてくれる？デュエルはそんなものじゃない！」

サイバー流の目指す、リスペクトデュエル。それは、全力で迎え撃つ事で相手に敬意を表し、理解し合う事！

「あんたに何が分かるの！？No・に頼らないと誰も、両親だって弱い私を見てくれない！」

「デュエルは、相手を尊重するものなんだ！No・なんてなくても、あたしはあなたを見てる！！」

かなめが私達を救ってくれた。今度は、あたしが誰かを救うんだ！デッキよ…応えて！！

「あたしがそれを証明する！あたしのターン！……来た！！あたしは、モンスターをセット！ターンエンド！」

興野真子LP7000

手札0枚

「…なにも出来てないじゃない！私のターン！罠カード、正統なる血統！（例えあの伏せカードが攻撃反応形でも、私の伏せカードはデストラクション・ジャマー。大丈夫！）ラビードラゴンを特殊召喚！更に、ラビードラゴンをリリース！偉大魔獣ガーゼットをアドバンス召喚！」

偉大魔獣ガーゼットATK5900

「ビッグアイの効果、オーバーレイユニットを一枚取り除く事で、相手モンスター一体のコントロールを得る！テンプレーション・グランス！」

「させない！速攻魔法、禁じらてた聖杯を発動！ビッグアイの攻撃力を400上げる代わりに、効果を無効にする！！」

No.11 ビッグアイ ATK3000 ORU2 1

「く、だったらビッグアイでセットモンスターを攻撃！」

「セットモンスターはメタモルポッド！お互い手札を全て捨てて、五枚ドロー！」

お願い…来て！

興野真子

手札5枚

女の子

手札5枚

「くっ…ガーゼットで攻撃！」

「うう…。」

興野真子 LP1100

「私は、カードを一枚伏せ、ターンエンド！」

女の子 LP2550

手札4枚

結構手痛かったな…。

でも、これで全て揃った！

「あたしのターン！速攻魔法、サイクロン！今伏せられたカードを

破壊！そして、死者蘇生！墓地からサイバードラゴンを特殊召喚！」

サイバードラゴン ATK 2100

「そして、プロトサイバードラゴンを召喚！効果で、サイバードラゴンとして扱う。」

プロトサイバードラゴン ATK 1100

「これがあたしの全力！魔法カード、パワーボンドを発動！」

「パワー…ボンド…！？」

「手札のサイバードラゴン、場のサイバードラゴン、プロトサイバードラゴンを融合！！サイバー流奥義、サイバー・エンド・ドラゴン！」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK 8000

「パワーボンドの効果で、攻撃力は二倍！！バトル、サイバー・エンド・ドラゴンで、ビッグアイを攻撃！届け！エターナル・エボリューション・バーストオオオ！」

「きゃあああ！！！」

女の子 LP 0

「楽しい、良いデュエルだったよ！」

指を前に出し、伝説の彼を真似したポーズをする。ちょっと恥ずか

しいな。

「……本当に…？」

「ん？」

「本当に、私何かと友達になってくれる？」

「当たり前じゃん！一度デュエルしたら友達！！今度はN.O.なんて無しでやろうよ！！」

「あり…がと…。」

女の子が、涙を流してお礼を言ってくれる。
よかった。救えたんだな…。

「真子ちゃん！」

かなめが駆け付けてくる。

「おう、はい、N.O.のカード。」

「あ、ありがとう。銀次さんの所に…」

「行かせねえッスよ！」

突然、男が一人現れた。 一体どこから…？

「せっかク街中のN.O.所持者を暴れさせてるんだ！まだ、四条の所には行かせねえッス！」

「あなたがあの子を……！！だったら……！」

かなめがデュエルディスクを構える。

「ハッ面白エっ！」

「デュエル……！」

side：譲二

俺、設楽譲二の朝は遅い。何故なら、この所我が店には閑古鳥が鳴いていて、今日は休みとしているからだ。

「ん……外が騒がしいな……。」

外から聞こえる声が気になり、外に出てみる。

「な……んだこりゃ？」

外では、沢山の人間がデュエルをしている。これだけなら普通の光景だ。なにせ、この世界はデュエルの腕がものを言う。ただ、変なのは……

「はははは！行け、No.所持者どもよ！この街をカオスに陥れてやれ……！」

俺の店の前で高笑いしている女性だ。

「あのおー、何してんすか？」

「ははは…あ。」

俺に気付いた女性は、赤面し、走って逃げ行った。

第12話 暴動、街にて。（後書き）

女の子のデッキは

【凡骨ビート】です。

後に順レギュラー化するかもしれません。

第11話の間違い指摘、ありがとうございます！…早速修正いたしました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8735z/>

遊戯王～Parallel Story～

2012年1月12日20時56分発行